

鹿児島大学英語教育改革報告書 II

＜平成21年度－平成22年度＞

鹿児島大学教育センター
外国語教育推進部

目 次

序	1
1. 21年度・22年度 G-TELP の実施状況について	1
1-1 G-TELP の実施概要	1
1-2 1年次での成績推移	2
1-3 1年次から2年次前期までの成績推移	3
1-4 各セクションの得点分布	4
1-5 まとめ	4
1-6 G-TELP 導入による評価の平準化の状況について	4
1-6-1 評価の平準化とは	4
1-6-2 G-TELP の導入による評価の平準化の状況	6
1-6-3 まとめ	9
1-7 学生によるアンケート結果について	9
1-8 学生の Moodle 活用状況について	11
2. 入学区分と G-TELP の相関について	14
3. 出身県別区分と G-TELP の相関について	16
4. 現行制度が抱える課題	18
4-1 推奨テキスト制度をめぐって	18
4-2 英語カリキュラムについて	27
5. 結語	28
巻末データ	29

鹿児島大学英語教育改革報告書 II

＜平成 21 年度—平成 22 年度＞

鹿児島大学教育センター外国語教育推進部

序： 本報告書は、先般刊行した「鹿児島大学英語教育改革報告書」の続編として編集したものである。平成 20 年度に始まった鹿児島大学の英語教育改革は平成 22 年度で 3 年経過した段階であり、その間様々なデータの蓄積がなされ、改革の進捗状況を見る上でそれらのデータを検証する、ということが本報告書編集の主たる意図である。

1. 21 年度・22 年度 G-TELP の実施状況について

1-1 G-TELP の実施概要

本学では 20 年度から各学期の第 11 週前後に、G-TELP (General Test of English Language Proficiency) (国際英検) を実施している。このテストは、文法、聴解、読解、の 3 領域からなる目標基準準拠テストである。この G-TELP について、日本では最も難易度の高いレベル 1 からレベル 4 までのテストが実施可能となっているが、本学ではこのうちレベル 3 (英検準 2 級—2 級、TOEIC 400—600 程度) を採用している。21 年度と 22 年度は、資料 1 に示した日程で実施した。

資料 1 21 年度・22 年度 G-TELP の実施概要

実施年度	21 年度		22 年度	
	前期	後期	前期	後期
実施期間	6 月 22 日(月)～ 6 月 26 日(金)	12 月 14 日(月)～ 12 月 18 日(金)	6 月 21 日(月)～ 6 月 25 日(金)	12 月 13 日(月)～ 12 月 17 日(金)
受験対象者 (実受験者数)	1 年生 (2003 名)	1 年生 (1759 名)	1 年生 (1980 名)	1 年生 (1766 名)
			2 年生 (1070 名)	
試験問題	Form 313	Form 315	Form 313 (1 年生)	Form 315
			Form 319 (2 年生)	

本学での G-TELP は、1 年生向けの共通教育英語科目履修者全員を受験対象とし、これらの授業時間中に各担当教員に実施を依頼して行っている。また、22 年度から、2 年生向けに全 8 学部中 5 学部で開設している共通教育英語科目「英語オープン」クラス履修者全員も受験対象とした。試験実施に際し、病気などの理由で受験できなかった学生への対策として、2 日間の予備日も設けた。

資料 1 の受験者数を見ると、両年度とも後期での受験者数が 200 人以上減少している。これは、本学の技能審査(外国語技能検定試験)合格者等の単位認定制度を利用して、英検や TOEIC などの資格や成績を取得し、後期に英語科目を履修せずに単位認定を申請する学生が増えるためと思われる。

1-2 1年次での成績推移

21年度・22年度のG-TELP試験結果について、まず1年次での成績推移について概説する。資料2は、本学の前期と後期で使用している試験問題の全国平均点を示している。本学では前期にForm 313を、後期にForm 315を使用している。また、資料3及び4は、21年度と22年度の本学全体の平均点の推移を示している。

なお、本稿で示すt検定で有意差を検証した全ての資料は、より正確な比較を期すため、各比較対象期間すべての試験を受験した学生のみを対象として分析している。そのため、これらのデータでの対象者は、資料1で示した受験者数と若干異なる。例えば、前期と後期の平均点を比較した資料3では、前期と後期の両方受けた学生のデータに基づく結果を示している。

資料2 G-TELPのForm 313, 315の全国平均点

	セクション	Form 313	Form 315	得点差
全国	GRM	59.9	64.9	5.0
	LST	41.0	46.3	5.3
	RDG	52.6	50.7	-1.9
	TTL	153.4	161.9	8.5

注) GRM=文法、LST=聴解、RDG=読解、TTL=合計

資料3 G-TELPの鹿児島大学全学平均点推移(21年度)(調査対象者:1733名)

	セクション	21 前期 (Form 313)	21 後期 (Form 315)	得点差	有意差
全学	GRM	60.2	68.5	8.3	あり
	LST	41.6	47.4	5.8	あり
	RDG	56.4	55.7	-0.7	あり
	TTL	158.2	171.6	13.4	あり

資料4 G-TELPの鹿児島大学全学平均点推移(22年度)(調査対象者:1724名)

	セクション	22 前期 (Form 313)	22 後期 (Form 315)	得点差	有意差
全学	GRM	59.6	67.8	8.2	あり
	LST	41.4	47.2	5.9	あり
	RDG	56.5	55.8	-0.7	なし
	TTL	157.5	170.9	13.4	あり

まず、資料3と4が示すとおり、両年度とも全学的にTTL(合計点)は前期と比べて後期では上昇している。また、試験の各セクションのうち、GRM(文法)とLST(聴解)は後期で得点が増加し、RDG(読解)は低下している。そこで、これらの得点の推移が単に偶然だったのか、それとも明確な理由による結果だったのかを確認するため、t検定で検証した。その結果、後期で得点の上昇が見られたGRM、LST、TTLについては、それぞれの推移に両年度とも有意差があった(巻末に詳細データを記載)。有意差とは、偶然に起こる可能性が極めて少ない差であり、受験者の英語能力に意味のある明確な差があったことを示す。つまり、両年度ともGRMとLSTの力は向上し、またTTLの結果からも、総合的に英語力は向上した、と言える。

一方、後期でのRDGの低下については、t検定の結果、21年度は有意差があった。つまり、何らかの明確な理由があって得点が下落したことが示唆される。また、22年度の下落には有意差が見られなかった。このことから、22年度では、21年度よりもRDG力の低下が抑えられた、と言える。

後期でのRDG力が低下、あるいは前期と同水準で推移した理由については、今後、詳しく検証する必要があるが、理由のひとつとして、前期と後期の試験問題の違い、ということも考えられる。資料2で示した2つの試験問題の全国平均点を比較しても、本学で後期に使用しているForm 315のRDGの全国平均点は、前期に使用しているForm 313での点数よりも1.9ポイント低くなっている。

資料 5 と 6 では、両年度の試験結果を学部別にまとめている。得点推移の傾向は、全学同様、GRM、LST、TTL は後期で得点が上昇し、RDG は低下する傾向が見られた。後期での TTL の伸びは、t 検定の結果、ほとんどの学部の数値に有意差があり、これらの学部では後期には明らかに英語力は向上した、と言える。その後期での伸びの幅は、学部によって差が見られた。例えば 22 年度の合計点の得点差を見た場合、水産学部の伸びの数値（得点差 18.2 ポイント）は、工学部の伸びの数値（得点差 9.2 ポイント）の倍近くあった。このように、学部によって伸びに差があることに何か要因があるのか、今後、調査する必要がある。

資料 5 学部別平均点推移（21 年度）

	セクション	21 前期	21 後期	得点差	有意差
医学部 医学科	GRM	81.5	89.6	8.1	あり
	LST	52.3	58.9	6.6	あり
	RDG	79.1	79.7	0.6	なし
	TTL	212.9	228.2	15.3	あり
医学部 保健学科	GRM	59.8	74.2	14.4	あり
	LST	39.9	48.7	8.8	あり
	RDG	58.2	58.6	0.4	なし
	TTL	157.9	181.5	23.6	あり
教育学部	GRM	58.6	66.6	7.9	あり
	LST	41.1	45.8	4.7	あり
	RDG	54.5	53.6	-0.9	なし
	TTL	154.2	166.0	11.7	あり
工学部	GRM	57.5	63.8	6.3	あり
	LST	39.8	43.9	4.1	あり
	RDG	51.5	51.4	-0.1	なし
	TTL	148.9	159.1	10.3	あり
歯学部	GRM	76.6	82.7	6.1	あり
	LST	45.6	54.9	9.3	あり
	RDG	72.7	69.6	-3.0	なし
	TTL	194.9	207.3	12.4	なし
水産学部	GRM	52.9	61.3	8.4	あり
	LST	39.4	45.0	5.7	あり
	RDG	47.4	48.8	1.3	なし
	TTL	139.7	155.1	15.4	あり
農学部	GRM	61.0	69.5	8.5	あり
	LST	41.0	48.5	7.6	あり
	RDG	55.9	55.5	-0.4	なし
	TTL	157.9	173.6	15.6	あり
法文学部	GRM	65.8	74.3	8.5	あり
	LST	43.8	51.1	7.3	あり
	RDG	63.5	61.6	-1.9	あり
	TTL	173.1	187.0	13.8	あり
理学部	GRM	54.7	65.1	10.4	あり
	LST	41.9	46.0	4.2	あり
	RDG	54.8	52.7	-2.1	あり
	TTL	151.3	163.8	12.4	あり

資料 6 学部別平均点推移（22 年度）

	セクション	22 前期	22 後期	得点差	有意差
医学部 医学科	GRM	80.1	85.6	5.5	あり
	LST	50.5	59.1	8.6	あり
	RDG	79.9	76.9	-2.9	なし
	TTL	210.5	221.6	11.1	あり
医学部 保健学科	GRM	63.8	71.2	7.4	あり
	LST	40.7	49.3	8.6	あり
	RDG	58.2	56.3	-1.9	なし
	TTL	162.7	176.8	14.1	あり
教育学部	GRM	57.3	66.0	8.7	あり
	LST	39.2	45.3	6.2	あり
	RDG	53.5	53.7	0.2	なし
	TTL	150.0	165.0	15.1	あり
工学部	GRM	54.5	61.4	7.0	あり
	LST	39.9	43.1	3.2	あり
	RDG	51.2	50.3	-0.9	なし
	TTL	145.6	154.9	9.2	あり
歯学部	GRM	62.5	78.1	15.6	あり
	LST	48.7	48.4	-0.3	あり
	RDG	65.4	65.7	0.3	なし
	TTL	176.6	192.2	15.6	あり
水産学部	GRM	54.2	63.9	9.7	あり
	LST	40.1	46.8	6.7	あり
	RDG	50.4	52.3	1.9	なし
	TTL	144.7	163.0	18.2	あり
農学部	GRM	62.2	71.6	9.4	あり
	LST	43.2	49.5	6.4	あり
	RDG	58.6	58.4	-0.1	なし
	TTL	163.9	179.6	15.6	あり
法文学部	GRM	65.2	73.6	8.4	あり
	LST	42.8	50.9	8.0	あり
	RDG	63.4	61.9	-1.5	あり
	TTL	171.5	186.4	14.9	あり
理学部	GRM	56.1	64.9	8.8	あり
	LST	40.7	45.5	4.8	あり
	RDG	52.9	52.0	-0.9	なし
	TTL	149.7	162.4	12.7	あり

1-3 1 年次から 2 年次前期までの成績推移

22 年度から、2 年次前期に教育学部、水産学部、農学部、理学部、工学部の 5 学部で開設されている英語オープン履修者にも、G-TELP 受験を義務付けた。このことで、同一学生を 1 年次前期・後期、2 年次前期の 3 期にわたって追跡調査することが可能となった。この調査結果を、資料 7 と 8 で示している。

資料 6 英語オープン履修者の G-TELP における 3 期平均点推移 (調査対象者 : 962 名)

セクション	1 年次		2 年次
	21 年前期	21 年後期	22 年前期
GRM	58.0	65.8	62.9
LST	41.0	46.0	49.8
RDG	53.4	53.1	54.1
TTL	152.4	164.8	166.8

資料 7 英語オープン履修者の G-TELP の平均点推移 (調査対象者 : 962 名)

セクション	21 前期-21 後期		21 後期-22 前期	
	差	有意差	差	有意差
GRM	7.8	あり	-2.9	あり
LST	5	あり	3.8	あり
RDG	-0.4	なし	1	あり
TTL	12.4	あり	1.9	あり

資料 7 から、TTL は受験回数を重ねるごとに伸びが見られる。また、資料 8 から、これら 21 年前期から後期の伸び (12.4 ポイント) と、21 年後期から 22 年前期にかけての TTL の伸び (1.9 ポイント) は、それぞれ統計的に有意差があった (巻末の詳細データを参照)。得点の伸びは、1 年次の 21 年前期—後期に比べて 2 年次の 21 年後期—22 年前期は鈍化している。しかし、英語オープン履修者が所属する学部では、1 年次は英語科目を週 2 科目履修し、2 年次は英語オープンのみ週 1 科目履修する体制となっている点を考慮する必要がある。週 1 回授業の体制でも有意的な伸びが出ており、今後考えられるカリキュラム改編の方向性に関して、一つの参考資料ともなりうると考えられる。

各セクションの点数の推移を見ると、GRM は 21 年後期—22 年前期にかけてマイナス 2.9 ポイントで、この下落には有意差があった。次に、LST は一貫して有意差がある伸びが見られた。また RDG は、21 年前期—後期で微減したものの、21 年後期—22 年前期では有意差のある向上が見られた。これらの結果の理由は、使用された Form の違いによる可能性やその他の可能性など、今後検証していく必要がある。

1-4 各セクションの得点分布

21 年度と 22 年度のそれぞれの試験について、各セクションの得点分布状況を見ると (データは巻末にまとめて掲載)、両年度とも、GRM は比較的、高得点層に分布が集中している。また、LST の分散は、GRM や RDG に比べて小さい傾向が見られる。LST の素点は 40 点台から 50 点台に得点が集中していることから、共通の要因で得点に結びつかなかった受験者が多かったことが伺える。今後は、学生の解答状況をさらに詳細に分析していく必要がある。

1-5 まとめ

前回の報告書 (22 年 3 月) で示した 20 年度のデータと比較しても、本学での G-TELP の成績は、21 年度、22 年度とも、大体同じような傾向で推移していることが確認できた。G-TELP 導入直後のこの 3 年間に収集した基礎データを基に、今後は明らかになった課題をひとつひとつ検証し、その結果を、例えば共通教育英語科目の各授業の指導で活かせるように提示し、それが最終的に学生の英語力の向上につながっていく、というように、G-TELP をより体系的な仕組みの中で活用していくことも考えられる。

1-6 G-TELP 導入による評価の平準化の状況について

1-6-1 評価の平準化とは

本学では、1 年次の共通教育英語科目では、個別的試験を 80%、G-TELP を 20% で期末評価を出している。また 22 年度からは、2 年次の共通教育英語科目のひとつである英語オープンク

ラスでもこの仕組みを導入した。成績評価の対象になる G-TELP のセクションは、科目によって異なる。これは、各科目と最も関連性の深いセクションを抽出して評価することによる。例えば 22 年度は、資料 9 の各科目で、●のついたセクションを成績評価の対象とした。

資料 9 G-TELP 評価対象セクション (22 年度)

		G-TELP の 3 つのセクション		
		Grammar	Listening	Reading &
科目名	コア C、C1、C2	●		
	コア U、U1	●	●	●
	コア 0		●	
	コア R、R1、R2			●
	インテンシブ英語	●	●	●
	英語特別演習	●		●
	英語オープン	*	*	*

*英語オープンクラスについては、各担当教員の申請に基づくセクションを算出。

この仕組みのねらいは、以下の 3 点に要約できる：

- 授業環境・効率の改善と教育成果が客観的に確認できるシステムの構築を目指す。
- 実力テスト(G-TELP)を期末評価の一部として導入することで、教員による評価のバラつき（いわゆる厳しい評価・甘い評価の別）をある程度是正して平準性の高い評価システムを構築する。
- 期末試験対策は当該授業のテキストの学習のみで十分と考える慣習的・旧来的学習観を教員・学生ともに改め、学生に普段の自主学習による実力養成の重要性を認識させる。

GPA 制度導入以来、とくに厳しく求められるようになったのは「評価の平準性・厳格性」という概念である。このことは平成 20 年 3 月に国立大学協会から出された「国立大学の目指すべき方向 —自主行動の指針—」の中にもはっきりと打ち出されている方向性である。このような国策的ガイドラインが意味するところは、教員による評価にいわゆる甘い・厳しい、のバラつきがある、という従来型の個別定期試験制度で必ずきかれる声に何らかの形で対処することが、国立大学の今後のあり方として望ましいということである。さらに、習熟度別クラス編成にした際、多くの大学で聞かれるのはいわゆる‘単位の質’の問題である。これは端的に言えば、上級クラスの‘優’と下位クラスの‘優’は同質とはいえないのではないかという、これも裏を返せば、習熟度別クラス編成下での個別定期試験制度に対する疑問もしくは批判と考えられる。

このような単位の質、評価の平準性の問題に関して、以下に G-TELP を 20%導入によって考えられる評価変動パターンを以下に示して解説する。

資料 10 G-TELP20%導入によって考えられる評価変動パターン

パターン	学生	(定期試験)	(G-TELP)	期末評価	評価の変動
A	吉田太郎	59 / 80 (= 74 / 100) (良)	14 / 20 (= 70 / 100)	73 / 100 (良)	ゼロ変動
B	佐藤花子	72 / 80 (= 90 / 100) (秀)	9 / 20 (= 45 / 100)	81 / 100 (優)	ダウン変動
C	鈴木一郎	54 / 80 (= 68 / 100) (可)	18 / 20 (= 90 / 100)	72 / 100 (良)	アップ変動

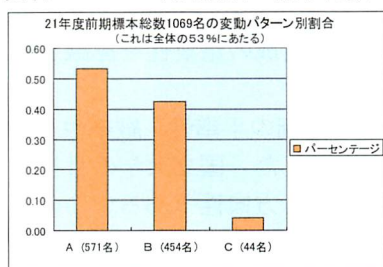
資料 10 は G-TELP20% の英語成績評価への導入が評価にどのような影響を及ぼすかについて 3 つの考えられるパターンを示している。パターン A は教員による個別定期試験結果が 80 点満点の 59 点であり、これは 100 点満点では 74 点で、秀(100~90)、優(89~80)、良(79~70)、可(69~60)、不可(59~) の GPA 制度下では「良」にあ

たる。このパターンではG-TELP20点満点で14点、これは100点満点では70点に相当し、トータルでは73点となり「良」の評価である。つまりパターンAでは、旧来型の定期試験のみの評価とG-TELP結果を加えた総合評価に変動がないのでこれを「ゼロ変動」と呼ぶことにする。パターンBは教員による個別定期試験結果が80点満点の72点であり、これは100点満点では90点で、秀(100～90)、優(89～80)、良(79～70)、可(69～60)、不可(59～)のGPA制度下では「秀」にあたる。ところがこのパターンではG-TELPは20点満点で9点、これは100点満点では45点に相当し、トータルでは81点となり「優」の評価である。つまりパターンBでは、旧来型の定期試験のみの評価とG-TELP結果を加えた総合評価との間に下降変動がみられるのでこれを「ダウン変動」と呼ぶことにする。最後に、パターンCは教員による個別定期試験結果が80点満点の54点であり、これは100点満点では68点で、秀(100～90)、優(89～80)、良(79～70)、可(69～60)、不可(59～)のGPA制度下では「可」にあたる。ところがこのパターンではG-TELPは20点満点で18点で、100点満点では90点に相当し、トータルでは72点となり「良」の評価である。つまりパターンCでは、旧来型の定期試験のみの評価とG-TELP結果を加えた総合評価との間に上昇変動がみられるのでこれを「アップ変動」と呼ぶことにする。

1-6-2 G-TELP の導入による評価の平準化の状況

以下に、グラフを使って G-TELP20%評価が英語の期末評価にもたらした影響について述べたい。まず、資料 11 は、21 年度前期の結果を示している（標本数は 1069 名。これは母集団 2010 名の約 53%にあたる。標本は全 8 学部のうち 7 学部にまたがる）：

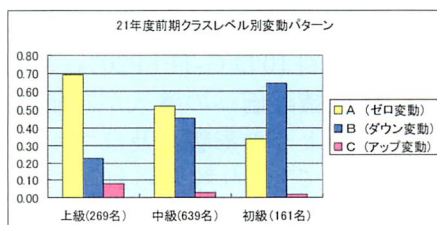
資料 11: 21 年度前期 標本総数 (1069 名) の変動パターン別割合



変動パターン	A(ゼロ変動)	B(ダウン変動)	C(アップ変動)
パーセンテージ	53.40%	42.50%	4.10%

この結果を見ると、G-TELP の 20%導入によっても評価に変動のないゼロ変動パターンが最も多く全体の 53.40%、ダウン変動が 42.50%、アップ変動が最も少なく 4.10%である。前回の調査 (20 年度前期) とほぼ同じ傾向である。これをクラスのレベル別に見ると以下のようなグラフになる：

資料 12 21 年度前期 クラスレベル別変動パターン



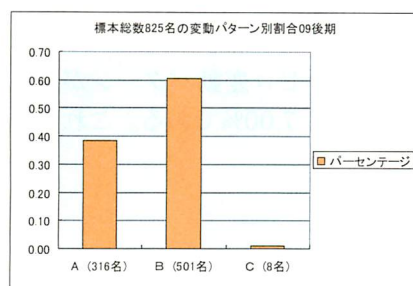
	上級(269名)	中級(639名)	初級(161名)
A(ゼロ変動)	69.10%	51.80%	33.50%
B(ダウン変動)	23%	45.20%	64.60%
C(アップ変動)	8.10%	3.00%	1.90%

資料 12 を見ると、中級と初級には、ゼロ変動が多く続いてダウン変動がともに多い。上級

には、アップ変動が多い点が注目される。これは、上級の学生たちがこのようなテストが得意であるからと予測される。上級と中級のパターンは、前回の結果とおおまかには同じである。このグラフで注目すべきは、ダウン変動が上級、中級、初級と割合が上昇しているという点である。これは、初級の場合、個別定期試験の結果が良くても、G-TELPの結果によって全体が押し下げられている傾向があるということを表している。言い換えれば、下のレベルの学生が簡単に秀や優レベルを取れていないということを意味し、評価の平準の方向性が出ていると推測することができる。初級の結果は、前回の結果と比べてあまり変わらないが、ゼロ変動がダウン変動より少し増えた。アップ変動は上級、初級、中級に見られるが、それらは、個別定期試験の結果が悪くても、実力試験である G-TELP である程度カバーしているパターンが見て取れる。

この変動パターンが 21 年度後期はどうであったかについて以下のグラフを見ることにする。(標本数は 825 名。これは母集団 1759 名の約 47%にあたる。標本は全 8 学部のうち 7 学部にまたがる)

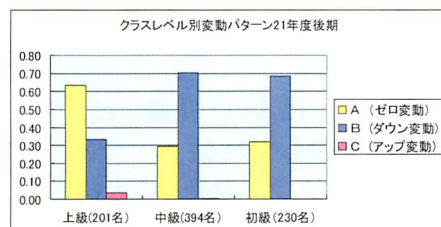
資料 13: 21 年度後期 標本総数 (825 名) の変動パターン別割合



変動パターン	A(ゼロ変動)	B(ダウン変動)	C(アップ変動)
パーセンテージ	38.30%	60.70%	1.00%

21 年度前期の標本総数に比較すると、ダウン変動とゼロ変動の割合がほぼ入れ替わったかたちになった。アップ変動はほとんど変わらず少ない割合である。

資料 14 21 年度後期 クラスレベル別変動パターン



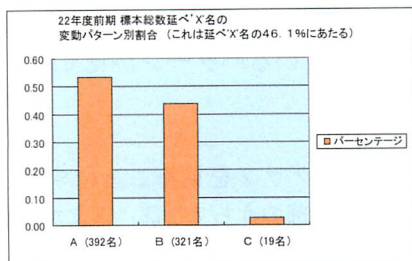
	上級(201名)	中級(394名)	初級(230名)
A(ゼロ変動)	63.20%	29.40%	31.70%
B(ダウン変動)	33%	70.30%	68.30%
C(アップ変動)	3.80%	0.30%	0.00%

資料 14 を見ると、前期のゼロ変動とダウン変動のパターンは、ほぼ同じである。クラスのレベルが下がるにつれて、ダウン変動の割合が上昇していつている。他に注目すべき点は、ゼロ変動は、中級と初級は、ダウン変動の割合より低くなっている。この傾向は、前回の調査 (20 年後期) と比べてゼロ変動とダウン変動の比較としてはほとんど同じである。このグラフでは、中級と初級のダウン変動は、ともに、G-TELP の 20% の評価導入が成績評価に少なからぬ影響を及ぼしていることがわかる。アップ変動の傾向は、前回の調査 (20 年後期) と前期の結果とほぼ同じである。前期のパターンと異なり、なぜダウン変動の割合が高くなったか、その原因としては以下の 3 つが考えられる: 1) 科目が前期と後期では異なる (前後期は、ほぼ半分がオーラルクラスである); 2) G-TELP の 20% 評価の当該領域が前期と異なる; 3) 担当教員が

代わった。

この変動パターンが22年度前期はどうであったかについて以下のグラフを見ることにする。
(標本数は686名。これは母集団1980名の約35%にあたる。標本は全8学部のうち7学部にまたがる)

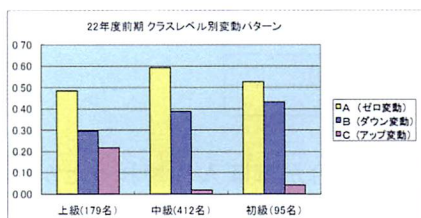
資料15 22年度前期 標本総数(686名)の変動パターン別割合



変動パターン	A(ゼロ変動)	B(ダウン変動)	C(アップ変動)
パーセンテージ	56.00%	37.00%	7.00%

この結果を見ると、G-TELPの20%導入によっても評価に変動のないゼロ変動パターンが最も多く全体の56.00%、ダウン変動が37.00%、アップ変動が最も少なく7.00%である。これをクラスのレベル別に見ると以下のようなグラフになる：

資料16 22年度前期 クラスレベル別変動パターン

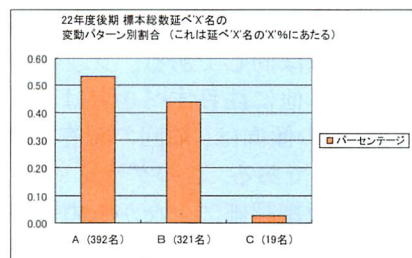


	上級(179名)	中級(412名)	初級(95名)
A(ゼロ変動)	48.60%	59.22%	52.63%
B(ダウン変動)	29.60%	38.84%	43.16%
C(アップ変動)	21.80%	1.94%	4.21%

資料16は、中級と初級には、ゼロ変動が多く続いてダウンがともに多い。上級には、アップが多い。ここでも、ダウン変動の割合が、上級、中級、初級と上昇している。

この変動パターンが22年度後期はどうであったかについて以下のグラフを見ることにする。
(標本数は751名。これは母集団1766名の約42.6%にあたる。標本は全8学部のうち7学部にまたがる)

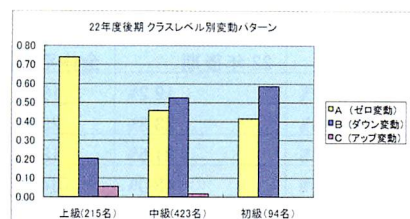
資料17 22年度後期 標本総数(751名)の変動パターン別割合



変動パターン	A(ゼロ変動)	B(ダウン変動)	C(アップ変動)
パーセンテージ	53.55%	43.85%	2.60%

資料 17 の結果は、このグラフは、前期のグラフとほぼ同じである。ゼロ変動の割合が少し減少しているが、過去 2 年の前期から後期の減少割合ほどではない。これをクラスのレベル別に見ると以下のようなグラフになる。

資料 18 22 年度後期 クラスレベル別変動パターン



	上級(215名)	中級(423名)	初級(94名)
A(ゼロ変動)	73.95%	45.86%	41.48%
B(ダウン変動)	20.47%	52.48%	58.51%
C(アップ変動)	5.58%	1.66%	0.00%

資料 18 を見ると、ダウン変動のパターンは、ほぼ同じである。クラスのレベルが下がるにつれて、ダウン変動の割合が増加している。他に注目すべき点は、ゼロ変動の上級の割合はかなり高くなっている。アップ変動の傾向は、前回の調査 22 年前期の結果とほぼ同じで初級には全く見られない。

1-6-3 まとめ

各注目すべきパターン変化をふまえ、過去 3 年にわたる全体の傾向は下記のものであった：

- ゼロ変動は、過去 3 年間、全体的に 50%を少し下回る結果(49.31%)である。
- ゼロ変動の残りの割合は、ほぼダウン変動である。ダウン変動は、過去 3 年間、全体的に 43%を少し上回る結果(43.57%)である。さらに、ダウン変動の学生は、上級、中級、初級の全レベルにみられるが、レベルが下にいく程、G-TELP テスト結果は、トータルの点数に大きな影響を及ぼしていると言える。
- アップ変動に関しては、全体の割合の中でもっとも低いですが、上級、中級、初級のほとんどのケースに見られ、ダウン変動が増えるとアップ変動が相反して、減る傾向にある事が注目される。

1-7 学生によるアンケート結果について

21 年度前・後期、22 年度前・後期、合計 2 年間（4 回）にわたる G-TELP 導入による学生アンケート調査結果を以下に示した（対象者：1 年生の G-TELP 受験者）。

資料 19 アンケート調査に用いた質問 5 項目

1	G-TELP の結果が英語の成績に一部反映されることにより、一夜漬けでない普通の英語学習の必要性を感じるようになった
2	Moddle 上で G-TELP 模擬試験にトライしたり、別の G-TELP 問題集をするなど、何らかの事前学習活動を行った
3	G-TELP のような外部試験を受験することにより、英語学習に対する学習意欲や目的意識が高まる
4	G-TELP 以外の、TOEIC, TOEFL, 英検等の外部試験について、1-2 年次(低学年)に受験する計画でいる
5	現在履修している英語科目に対して、ほぼ毎週(毎回)、授業時間外学習(自宅学習等)を行っている

資料 20 各質問に対する 2 年間の比較と全体平均

質問項目 1	21 年前期	21 年後期	22 年前期	22 年後期	全体平均
そう思う	38.2%	32.8%	43.0%	37.0%	37.8%
どちらかといえばそう思う	40.4%	40.3%	38.0%	39.4%	39.5%
どちらかといえばそう思わない	11.3%	13.3%	9.9%	12.3%	11.7%
そう思わない	10.1%	13.6%	9.2%	11.2%	11.0%

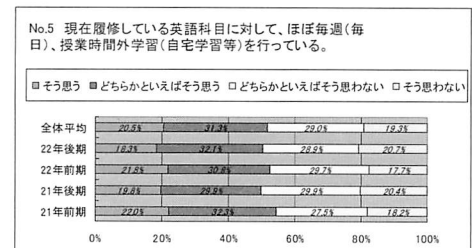
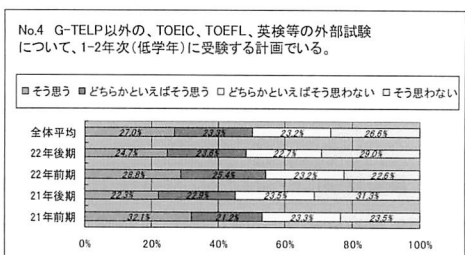
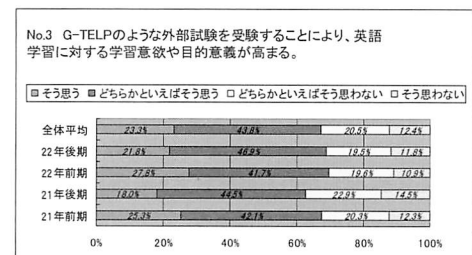
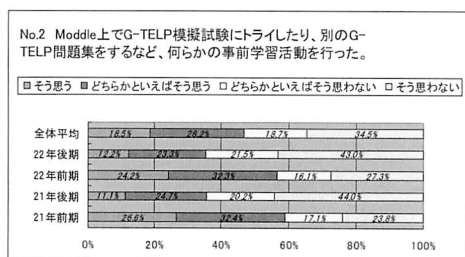
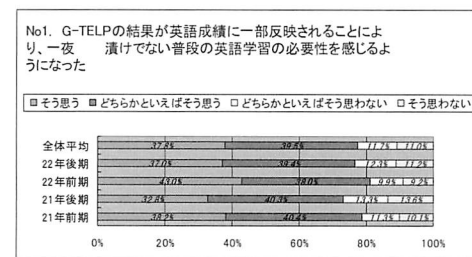
質問項目 2	21 年前期	21 年後期	22 年前期	22 年後期	全体平均
そう思う	26.6%	11.1%	24.2%	12.2%	18.5%
どちらかといえばそう思う	32.4%	24.7%	32.3%	23.3%	28.2%
どちらかといえばそう思わない	17.1%	20.2%	16.1%	21.5%	18.7%
そう思わない	23.8%	44.0%	27.3%	43.0%	34.5%

質問項目 3	21 年前期	21 年後期	22 年前期	22 年後期	全体平均
そう思う	25.3%	18.0%	27.8%	21.8%	23.3%
どちらかといえばそう思う	42.1%	44.5%	41.7%	46.9%	43.8%
どちらかといえばそう思わない	20.3%	22.9%	19.6%	19.5%	20.5%
そう思わない	12.3%	14.5%	10.9%	11.8%	12.4%

質問項目 4	21 年前期	21 年後期	22 年前期	22 年後期	全体平均
そう思う	32.1%	22.3%	28.8%	24.7%	27.0%
どちらかといえばそう思う	21.2%	22.9%	25.4%	23.6%	23.3%
どちらかといえばそう思わない	23.3%	23.5%	23.2%	22.7%	23.2%
そう思わない	23.5%	31.3%	22.6%	29.0%	26.6%

質問項目 5	21 年前期	21 年後期	22 年前期	22 年後期	全体平均
そう思う	22.0%	19.8%	21.8%	18.3%	20.5%
どちらかといえばそう思う	32.3%	29.9%	30.8%	32.1%	31.3%
どちらかといえばそう思わない	27.5%	29.9%	29.7%	28.9%	29.0%
そう思わない	18.2%	20.4%	17.7%	20.7%	19.3%

資料 21 各質問に対する 2 年間の比較と全体平均(グラフ化)



全体的な傾向として、第一点目は、英語学習に対する平素からの必要性（項目 1）、受験に向けた実際の学習準備活動（項目 2）、英語学習意欲・学習目的（項目 3）、外部試験受験への前向きな態度（項目 4）、そして授業時間外での自主的な学習活動（項目 5）全項目において、両年度ともに、前期のほうが後期より数値的に上回っている。学習観、学習行為、そして学習動機づけに関する領域を包括した質問 5 項目だが、それらすべてにおいて後期で下降するのはなぜだろうか。大半の受験者が 1 年生である事実から推測した場合、1 つには大学受験を終え、学生生活にも慣れ始め、大学英語授業の雰囲気などもわかり始めることによる惰性が考えられる。これは英語のみならず、他教科にもおそらく言えることである。

二点目の特徴として、質問ごとに考察してみると、情動面と行動面との乖離（開き）が大きく表れている。たとえば項目 1、3 は情動面に関連しているが、それぞれ全体平均をみると、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」を合わせた肯定レベルは、1=77.3%、3=67.1%と比較的高い数値となっている。他方、項目 2、4、5 の計画性や行動面をみると、2=46.7%、4=50.3%、5=51.8%とほぼ半数、つまり二人に一人の受験者は、学習行動をあまりとっておらず、何らかのビジョンをもって英語学習に取り組んでいないことがわかる。気持ちの上ではわかっている、またはわかろうとしているが、実際の行動には結びついていない実態が窺える。これはある面、学習動機づけと学習方法を含めた学習方略の脆弱さを示唆している。つまり、どのような英語学習スタイルを自分自身が納得しながら自律的に構築し、実践していくことができるか（方法論）。そのためには、まず、どのような本質的な英語学習の目的や最終的な目標を確立すべきか（目的論）。この 2 つのドメイン（領域）の「位置取り」が、各学習者によって真剣に行われたいといけませんが、現実にはどうやらなされていない。方法論と目的論が確立されて始めて、行動への意味づけが可能となってくる。その事実は、英語教育のみならず、学習行動を扱った教育心理学の領域でも多くの研究結果として報告されていることは言うまでもない。これまでの大学受験に向けた学習パターンや学習スタイルでは、大学に入った以上、その方法・目的において無意味に近い存在となる。大学という場での新たな英語学習に対する方法論と目的論が確立される必要がある。それによって、G-TELP という一つの学習効果を試す指標（手段）の意味も見えてくる。

前期では大学という環境全体に対する緊張感、そして G-TELP という新たな英語試験への興味と不安など、いわば「外発的要因」が働いている事実は、客観的にみても否定しがたい。それだけに、どうすれば「内発的要因」を各学習者が方法論、目的論の構築によって生み出していくことができるか。その点について、今後の G-TELP 受験に向けた学習指導上の対応だけでなく、大学英語授業・学習のあり方について、どのような見直しや新たな取り組みを進めていくべきか、俯瞰的な視点に立ちながら考究していく必要がある。

1-8 学生の Moodle 活用状況について

平成 20 年度前期から、本学の学生がオンライン学習で G-TELP 対策ができるよう、Moodle が活用されている。Moodle の G-TELP 模擬試験サイトは、教育センター英語教員の問題作成協力によるもので G-TELP のグラマー、リスニング、リーディング&ボキャブラリーのセクションにそれぞれ準拠した 4 つの完全テストから成っている。

本学の学生は、全員が 1 年次のオリエンテーション時に、Moodle へのアクセスについての情報を与えられる。本学在学中に、学生によっては教員が Moodle に投稿した様々な学習資料や課題に取り組むことになる。全体的な Moodle 使用の頻度は、在籍する学部によって大きく異なる可能性があり、この点は指摘しておく必要がある。Moodle は、学内や学外からログイン名とパスワードを使ってアクセス可能な、安全なオンライン学習機能である。本学では、水産学部や農学部など理系の学部の方が、他の学部よりも Moodle を利用した教材が充実している傾向にある。従って、Moodle の定期的なアクセス数は、ある分野を学ぶ学生のアクセスが、他の学生に比べて大きく左右している可能性がある。

Moodle での G-TELP 模擬テストは、当初、学生がテスト形式に充分慣れ、レベル 3 の各セクションの難易度に比較的近い内容例を紹介する機会とするために拡充していった。4 つの模

擬テストは、各セクションを単独で取り組むことができ、何度でも繰り返すことができ、また異なる順序で行うことができる。それぞれのセクションのスコアは、終了と同時に自動的に表示される。そのため、スコアを向上させたいと思えば、同じテストを何度でも取り組むことができる。

資料 22 G-TELP 模擬テストの解説例

Part 4: "Traditional Medicines"

Many people might not be aware of the fact that more than half the drugs we use today are derived from natural sources. One of the most commonly used and effective 'natural derivative drugs' is penicillin. Extracted from a common fungus, the development of the drug penicillin early in the 20th century led to the effective treatment of bacterial infections including the common cold and skin infections. At the time of its discovery, penicillin was known as a 'wonder drug' and is said to have saved the lives of millions of patients, world-wide.

Today the quest for new wonder-drugs goes on. Medical researchers and drug companies are constantly looking to natural sources for new cures, and this includes research into some traditional natural treatments used by healers or medicine men in various cultures around the world.

It is reassuring to know that traditional medicinal knowledge is being accepted, analyzed and increasingly integrated with modern medicine. Who knows, in the near future some tried and true natural cures that have endured over the centuries in indigenous cultures may hold the key to curing major diseases such as cancer, heart disease and HIV.

多くの人は気づいていないかもしれないが、現在使用されている薬の半数以上が天然資源から作られている。最も使われており、また、効果的な「自然原料薬」はペニシリンだ。ペニシリンは、普通のカビから抽出され、20世紀初頭に開発されたものだが、この薬は一般的なかぜや皮膚感染を含むバクテリア感染に対して効果を示した。発見当時、ペニシリンは「魔法の薬」として知られ、世界で何百万もの命を救ったとも言われている。今も新たな魔法薬は探し求められている。医療研究者や製薬会社は頻りに天然資源をもとにした新治療をめざしている。ここには世界の様々な文化での民間医療者やまじい師による昔ながらの伝統的な自然治癒に関する研究も含まれている。伝統的な医学知識が受け入れられ、分析され、現代医学と益々統合されてきているということは、元気づけられることである。土着文化のなかで過去何世紀にもわたって行われてきた信頼性の高い治療法のなかにはひょっとすると近い将来ガンや、心臓疾患、HIVなどの主要な病気の治療の力となるものがあるかもしれないのである。

19 Why is penicillin known as a 'wonder drug'?

得点: 0/1

1つの答えを選択してください。

a. because its discovery saved so many lives ✓

b. because no-one knows its origins ✗

c. because people wonder why it works ✗

d. because it was discovered by accident ✗

各セクションの解説は、テスト終了後に表示される。例えばグラマーのセクションでは、正解と短い説明が表示される。リスニングでは完全な台本が表示され、リーディングでは日本語訳が示される。これらの機能は、学生にとって受験前の自己学習として有益なものとなる。実際のテスト形式に従い、この練習問題での全てのセクションへの解答は選択式で、選択肢の順番は受験の度に自動的に入れ替わるようになっている。


20年度は、前期はG-TELP受験前にMoodle上で2つの完全模擬テストを開示した。後期には3つ目のテストを追加した。この際、表示させる順番を逆にし、追加したテスト3を最初にし、以下、テスト2、テスト1という形にした。この期間までMoodle (version 1.6) は、教育センターのサーバーにあった。しかし、20年度末からMoodleの管理は全学規模のものへと変わり、Moodleのversionは現在の1.9へと更新された。そのため、以前のサーバーにあった全てのコンテンツは、新しい鹿児島大学Moodleサーバーへと移管された。

21年の前期には、G-TELP対策模擬テストはテスト1からテスト4という順序で配列し、後期には前年度と同様その順序を逆にテスト4からテスト1へとした。残念なことに、この逆順はサーバーを新たに設定したことなどのいくつかの混乱も加わって技術的な問題が発生するにいたり、とりわけ、リスニング部門に関してのMP3ファイルとのリンクが失われることにつながってしまった。これらの問題の修復には時間がかかることになり、その結果22年は、G-TELPのサイト管理者は前期・後期ともにテスト1からテスト4への順序で模擬テストを開示することにした。

資料 23 G-TELP 模擬テストのリスニングセクション問題例

Part 4. You will hear a conversation between two people. First you will hear questions 1 through 6. Then you will hear the conversation. Choose the best response to each question in the time provided.

You may take notes when you listen to the questions and passage.

Listen 

(矢印をクリックしてください。ダウンロードするには右クリックで保存)

19 ◀

得点 0/1

一つの答えを選択してください。

a. She is going there on holiday.

b. She is going to relatives.

c. She lives there.

d. She is going on a business trip.

Moodle 使用によって、サイト管理者は G-TELP 対策模擬テストに関して様々なデータを集めることが可能である。それらのデータは学生個人成績、集団成績、テスト問題ごとのスコア分析、各学部毎の学生のアクセス件数など多岐にわたっている。

資料 24 G-TELP 対策模擬テストでの回答分析例

アイテム分析テーブル

問題ID	問題テキスト	解答テキスト	部分 点	解答数	解 答率
test5_10 (23/40)	Canadians generally travel between cities by car, bus or plane. Planes usually _____ less time than other methods of travel.	take	(1.00)	136/161	(84%)
		take		5/161	(3%)
		are taking		2/161	(1%)
		take 1 hour		11/161	(7%)

以下の表は 20 年度以降の各学部の G-TELP 対策模擬テストへのアクセス件数を示したものである。(注: アクセス件数 1 件が表わすのは、文法などの一つのテスト部門へのアクセスであり、テスト問題全体へのアクセスではない。)

資料 25 G-TELP 対策模擬テストへの学生のアクセス件数

学部	20 年度前期	20 年度後期	21 年度前期	21 年度後期	22 年度前期	22 年度後期
法文	1053	458	1461	745	1370	629
教育	458	216	827	213	569	126
理学部	299	166	509	155	344	119
医学部	463	115	569	255	536	141
歯学部	204	15	114	13	107	5
工学部	995	279	1157	292	908	214
農学部	422	282	641	214	845	392
水産学部	241	164	250	101	307	144
2 年生他	×	×	223	154	1114	×
*Listen up 全	×	×	×	154	159	37
合計:	4135 件	1695 件	5751 件	2142 件	6259 件	1807 件
前期後期比較		59%減		63%減		72%減
				(注 61%減)		(注 65%減)

*Listen up は追加されたリスニング問題である。(注: ここでのパーセンテージの下落は 1 年生のものであり、2 年生は含んでいない)

20 年から 22 年までに実施された 6 回の G-TELP テストに関して、G-TELP 対策模擬テストは実際のテスト実施の約 1 ヶ月前からテスト期間中にかけて学生に対してオンラインでアクセス可能な状況にしている。この期間中教育センターは積極的に G-TELP 対策模擬テストにアクセスするように学生に働きかけている。それは、すべての英語教員に情報を伝えたり、G-TELP 受験予定者全員に G-TELP や G-TELP 対策模擬テストのサイトについてメールで配信したり、大学のキャンパスのあちこちに Moodle G-TELP サイトに関する情報ポスターを掲示したりして実施している。教員の一部は、パソコンを使った授業を活用したり、教室の中で G-TELP のサイトにアクセスして、実際のテスト実施日直前まで学生に周知し続けているとい

う状況もある。これに加えて、20年の前期の初期の段階で、G-TELP サイト管理者は、英語コアU（総合）クラスのほとんどを訪れて学生と教員を対象に簡略なオリエンテーションを実施して、Moodle へのログオンの仕方に習熟させ、G-TELP 対策模擬テストについて周知をはかった。

資料に見られる通り、過去3年度分を振り返ってみると、前期から後期にかけてのアクセス数に大きな落差が見られる。G-TELP の総合スコア成績自体は、3年間を通じて、前期から後期にかけてどの年も伸びており、そうした伸びには影響はないものの、毎年度、前期に比べ、後期にアクセス数が少なくなるのは、教育センターとしては、心配の種である。この要因に関してはいろいろな意見があるであろうが、特に22年度前期から後期にかけてのアクセス数が65%落ちたことの要因や改善方策の視点として、次のような点があげられる。

- 22年度後期のG-TELP 試験対策用オンライン学習に関する注意喚起と奨励の呼びかけが、前年に比べ、遅かった。通常は、G-TELP 試験のひと月以上前から、行われていた。22年度後期の際は、20日前あたりであった。
- 22年度後期のG-TELP 受験に際し、学生の前向きな動機づけの低下が考えられる。前期は、初めての受験ということもあり、動機づけは高く、テスト自体やその準備学習への興味関心も高かったと思われる。多くの教員のみるところである。
- 22年度前期のG-TELP 試験結果が芳しくなかった学生の中には、後期の受験に対する準備意欲が低下した学生もいた可能性がある。
- ムードル上でG-TELP 模擬試験を提供する順序や方法が、前後期で同じであったが、このことは、多少なりとも予備学習の動機づけを下げたかもしれない。前後期の学生の取り組み状況の特徴を踏まえながら、違う順序や方法で事前学習を促すこともできるかもしれない。
- 英語の各クラス担当教師の側で、ムードル上での事前学習に関する認識にかなりのばらつきがあった可能性がある。予備学習サイトや担当クラスの習熟度別レベルを踏まえた奨励方法などの面で、適切な指導ができていたかどうか、反省する余地があるかもしれない。
- より興味深く、やっつためになる事前学習の中身（ムードル上での提供物）となるように、G-TELP の模擬試験や解説の提供の仕方に、さらなる工夫の余地があるであろう。

こうした点は、幾らか主観的な面もあるかもしれないが、今後さらに検討してみなければならない。後期にアクセス数が落ちる現象を洞察するには、学生がG-TELP 対策問題サイトをどうみているか、ならびに英語学習に対する態度や動機付けについて、詳細に考察する必要があるであろう。

毎回のG-TELP 受験者数がおよそ2000人おり、ムードル上でのG-TELP 事前学習が強制ではなく、自主性によって行われる点を考慮すれば、アクセス件数は総じて、学生達の英語学習におけるかなりの健闘を示す数字とも言える。

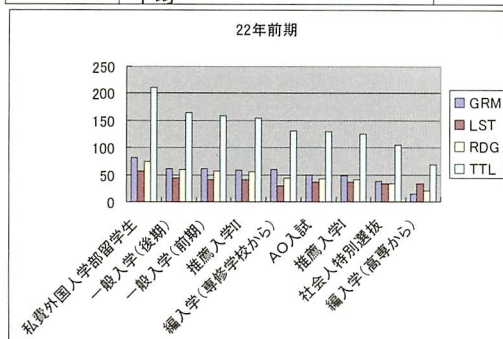
2. 入学区分とG-TELP の相関について

以下に、鹿児島大学の入学区分とG-TELP（22年度前期・後期実施分）の相関について見てみる。入試区分については、推薦入学はセンター試験を課さないIと、センター試験を課すIIがある。AO入学は理学部の中の3学科と水産学部の中の1学科のみで行なわれている。社会人特別選抜は教育学部の生涯教育総合課程が対象となっている。資料26を見ると、私費外国人留学生の得点がある他をかなり上回っていることがわかる。推薦入学で言えば、センター試験を課すIIのほうがセンター試験を課さないIを総得点で上回っている。G-TELP 受験者総数は、前期・後期ともに受験した学生の総数1723名を対象としている。総数に占める割合が

入試区分によって相当ばらつきがあるため、ここでの順位はあくまで参考ということになる。

資料 26 22 年前期

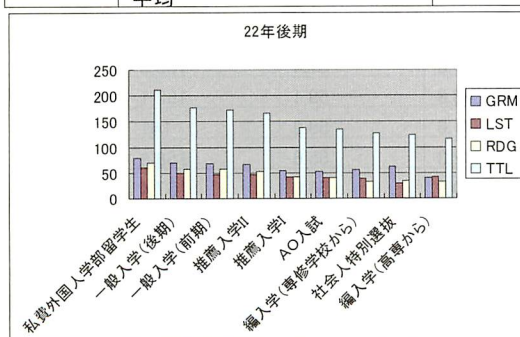
順位	入学区分名称	割合(%)	GRM	LST	RDG	TTL
1	私費外国人学部留学生	0.4	81.7	56	73.7	211.4
2	一般入学(後期)	14.6	60.4	43.6	60.1	164.1
3	一般入学(前期)	70.3	60.4	41.3	57.1	158.8
4	推薦入学Ⅱ	9.2	58.1	41.2	55.1	154.3
5	編入学(専修学校から)	0.3	59.2	29	43	131.2
6	AO入試	1.5	49.2	37	42.7	128.9
7	推薦入学Ⅰ	3.5	48	36.7	40.4	125.1
8	社会人特別選抜	0.1	38.5	33.5	33	105
9	編入学(高専から)	0.1	14	33	21	68
	平均		59.6	41.4	56.5	157.5



資料 27 にあるように、22 年度後期についても前期とほぼ同様の総得点順位になっている。前期と異なるのは前期 7 位だった推薦入学Ⅰが後期は 5 位に上昇している点。

資料 27 22 年後期

順位	入学区分名称	割合(%)	GRM	LST	RDG	TTL
1	私費外国人学部留学生	0.4	79.9	60.7	70.1	210.7
2	一般入学(後期)	14.6	70.3	49.3	57.8	177.3
3	一般入学(前期)	70.3	68.5	47.3	56.9	172.7
4	推薦入学Ⅱ	9.2	67	46.4	53.5	166.8
5	推薦入学Ⅰ	3.5	54	42.2	41.6	137.8
6	AO入試	1.5	53.1	40.6	40.9	134.6
7	編入学(専修学校から)	0.3	56.3	39	32.7	128
8	社会人特別選抜	0.1	61.5	29	33.5	124
9	編入学(高専から)	0.1	41	42	33	116
	平均		67.9	47.2	55.9	170.9

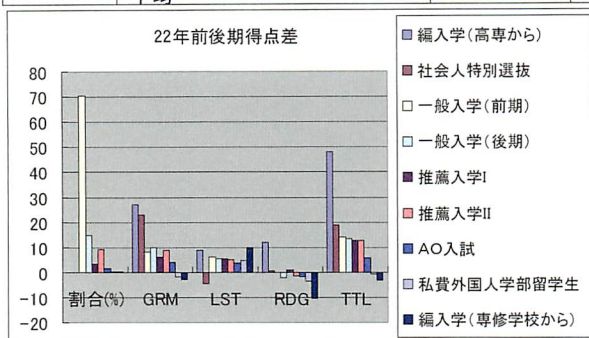


資料 28 は、22 年度前期・後期の得点差を表わしている。この表で注目すべきは前期・後期ともに総得点で 1 位だった私費外国人学部留学生がマイナスの伸びになっている点。他は大体において得点の伸びを示している中で比較的目立つ結果になっている。考えられる原因の一つはいわゆる学習高原状態になっているということが可能性としては挙げられるが、今後調査を

進める必要があると思われる。

資料 28 22 年前期・後期の得点差

順位	入学区分名称	割合(%)	GRM	LST	RDG	TTL
1	編入学(高専から)	0.1	27	9	12	48
2	社会人特別選抜	0.1	23	-4.5	0.5	19
3	一般入学(前期)	70.3	8.1	6	-0.2	13.9
4	一般入学(後期)	14.6	9.9	5.6	-2.3	13.3
5	推薦入学Ⅰ	3.5	6	5.5	1.1	12.7
6	推薦入学Ⅱ	9.2	8.9	5.2	-1.5	12.6
7	AO入試	1.5	3.9	3.6	-1.8	5.7
8	私費外国人学部留学生	0.4	-1.9	4.7	-3.6	-0.7
9	編入学(専修学校から)	0.3	-2.8	10	-10.3	-3.2
	平均		8.3	5.9	-0.7	13.5



以上、入学区分と G-TELP の相関についてみてきたが、このような調査は今回が初めてであり、今後も引き続き調査を進めていく考えである。本学のアドミッション・ポリシーにとって何かの参考になる面があるものと思われる。

3. 出身県別区分と G-TELP の相関について

以下に、鹿児島大学入学生の出身県別区分と G-TELP (22 年度前期・後期実施分) の相関について見てみる。G-TELP 受験者総数は、前期・後期ともに受験した学生の総数 1723 名を対象としている。

資料 29 を見ると、その他(外国人留学生)の得点が日本人学生を上回っていることがわかる。九州に限って言えば、1 位佐賀、2 位福岡で地元である鹿児島は 3 位となっている。ここでも、総数に占める各区分の割合に相当ばらつきが見られるため、順位は参考程度ということになる。

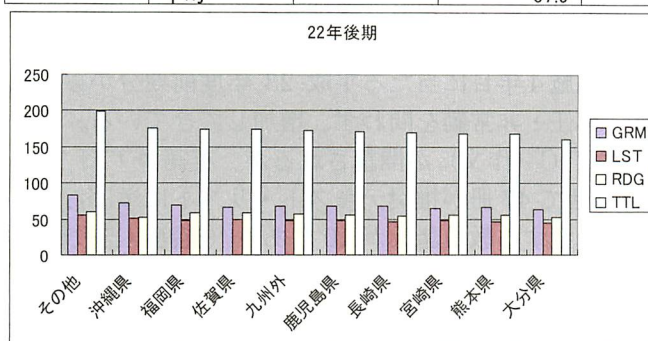
資料 29 22 年前期

順位	地区②	割合(%)	GRM	LST	RDG	TTL
1	その他	0.8	80.2	47.8	67.4	195.3
2	佐賀県	2.2	59.1	43.8	59.1	162.1
3	福岡県	10.6	60.1	41.6	59.2	161
4	九州外	8.6	60.7	42.3	55.6	158.6
5	鹿児島県	50.8	59.8	40.9	56.8	157.4
6	長崎県	6.2	58.9	42.6	55.5	156.9
7	熊本県	10.4	58.2	42	55.3	155.4
8	大分県	2.8	56.2	41.5	55.6	153.2
9	宮崎県	7.2	58.2	40.5	53	151.7
10	沖縄県	0.5	57.9	34.5	54.9	147.3
	平均		59.6	41.4	56.5	157.5

続いて、資料 30 を見ると後期は多少の順位の入替わりが見られる。前期の総得点最下位であった沖縄県が 2 位に躍進している。

資料 30 22 年後期

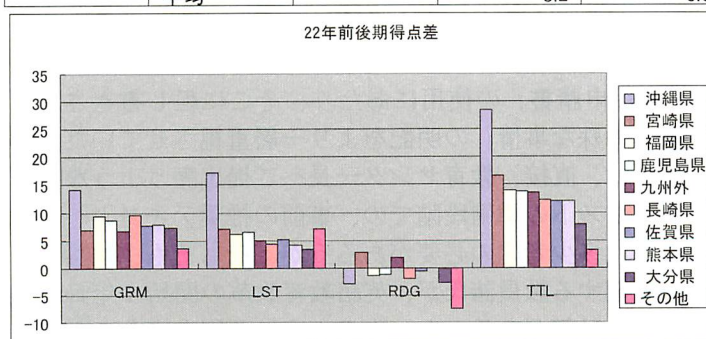
順位	地区②	割合(%)	GRM	LST	RDG	TTL
1	その他	0.8	83.8	54.8	59.9	198.5
2	沖縄県	0.5	72	51.6	52	175.6
3	福岡県	10.6	69.4	47.6	57.9	174.9
4	佐賀県	2.2	66.8	48.9	58.4	174.2
5	九州外	8.6	67.4	47.3	57.5	172.2
6	鹿児島県	50.8	68.3	47.3	55.6	171.1
7	長崎県	6.2	68.5	47	53.7	169.1
8	宮崎県	7.2	65	47.4	55.9	168.4
9	熊本県	10.4	66.1	46.2	55.2	167.5
10	大分県	2.8	63.4	44.9	52.9	161.1
	平均		67.9	47.2	55.9	170.9



資料 31 は前期・後期の得点差を表わしている。これを見ると沖縄県が前期から後期にかけて飛躍的に伸びているのがわかる。その他の留学生に関しては RDG（読解）で-7.5 を示すなど、伸びの悪さが目立つ結果となっている。

資料 31 22 年前期・後期の得点差

順位	地区②	割合(%)	GRM	LST	RDG	TTL
1	沖縄県	0.5	14.1	17.1	-2.9	28.4
2	宮崎県	7.2	6.9	7	2.9	16.7
3	福岡県	10.6	9.3	6	-1.3	13.9
4	鹿児島県	50.8	8.5	6.4	-1.2	13.7
5	九州外	8.6	6.7	5	1.9	13.6
6	長崎県	6.2	9.6	4.4	-1.9	12.2
7	佐賀県	2.2	7.7	5.1	-0.7	12.1
8	熊本県	10.4	7.9	4.2	-0.1	12.1
9	大分県	2.8	7.2	3.4	-2.7	7.9
10	その他	0.8	3.6	7	-7.5	3.2
	平均		8.2	6.6	-1.4	13.4



以上、本学の入学生の出身県別 G・TELP 相関を見てきたが、出身県別の入学生のレベルについて、ある程度示唆するところがあるものと考えられる。この調査も今回が初めてであり、今後の動向を知る上でも引き続き調査を進めていく考えである。

4. 現行制度が抱える課題

現行制度が抱える課題として、推奨テキスト制度と英語カリキュラム、とりわけ英語コア科目について述べておきたい。

4-1 推奨テキスト制度をめぐって

20年度より、コア英語クラス（英語コアU, C, O, R）で習熟度別編成を実施するにあたり、教育センターの英語作業部会で科目とレベルごとに選定した複数のテキストの中から、任意に教員が選択する、という体制をとっている。どうしても推奨テキスト以外のテキストを使用したい場合には、理由を添えて教育センターに申請し、了解のもとで推奨外テキストの使用を可能にするという制度上の幅も持たせている（「推奨テキスト以外のテキスト使用申請書」）。

ところが、このような推奨テキスト制度の実施4年目に当たる平成23年度前期分から、推奨外テキストの使用を希望する教員諸氏が、専任・非常勤を問わず、増加してきている。平成23年度前期は、英語コアU（総合）と英語コアC（作文）が開講されるが、英語コアUで25冊、英語コアC（作文）で22冊、前期分合わせて47冊が推奨テキスト・リストに挙げられている。そのようなとき、推奨外のテキストを希望する教員諸氏が10名あり（英語担当教員56名全体のおよそ18%）、推奨外テキストの申請数は科目単位で16件であった（英語コアUが10件と英語コアCが6件：前期英語コア開講科目全128科目のおよそ12%）。この中には、推奨テキスト・リストに挙げられているテキストの、該当レベルの変更や適用科目の変更を希望される例が3件含まれている。これらを、教育センターの英語作業部会にて審査した結果、16件の申請のうち、半数の8件が承認された。こうして、推奨テキストと、推奨テキストではないが手続きを踏んで承認されたテキストとが併存することとなる。現行カリキュラムを活かすにふさわしい構成や内容であれば、承認テキストが次年度以降の推奨テキストとなる可能性もある。

20年度前期の状況では、専任・非常勤を問わず、ほとんどの教員（96%）が推奨テキストの中から、適宜選択して使用していたことを考えると、推奨外テキストの使用を希望する教員諸氏が、23年度の準備段階で専任・非常勤を問わず増加してきていることは、教育センターへのひとつのシグナルであり、慎重に受け止めていかねばならない。^{*} 現況を考察し、24年度からは推奨テキスト制度の実施運用面での改善を図る必要があるように思われる。習熟度別クラス編成を続ける以上、この推奨テキスト制度の維持は不可欠であるからである。

^{*}21年度では、平成22年度用推奨テキスト・リスト作成準備の段階で、専任・非常勤を問わず、共通教育英語に係る教員諸氏に対し、推奨テキスト・リストに入れて良いと思われるテキストの推薦を促していた経緯がある。23年度用リストの作成準備の段階では、そのような事前の促しは行わなかったという点は多少考慮しなければならないであろう。

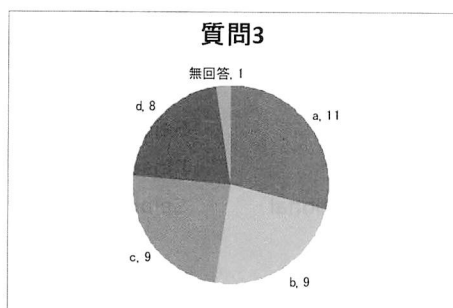
当面、「推奨テキスト以外のテキスト使用申請書」の使用にあたり、そこに但し書きされている、申請が必要となる「何らかの特別・特殊な事情」の明記をより一層重視させていただく方向で対応し、申請書の提出が必要な場合は、直接、教育センター長へご提出願うような手続き方法に変えてみることを検討中である。リストの準備段階での、事前の推奨テキストへの意向伺いをするかしないかによる結果の相違は多少考慮の必要があろうが、そもそも、推奨テキスト制度の中で推奨外テキストの使用を希望する教員諸氏が、英語教育改革の開始4年目を迎えようとする時期に増えてくることの背景には何があるのか。次のような要因も少なからず関係していると考えられる。

- (1) 推奨テキスト制度（テキスト選択における一定の制約）に対する本質的な心理的抵抗感（自由裁量志向の拡大化）

(2) そうした背景の根幹にあると思われる、外国語教育・英語教育の理念・目標に対する全学コンセンサスの脆弱性

(1) については、21年7月から8月にかけて、英語教員を対象に行った英語教育改革に関するアンケート結果の一端に、既に前兆をみることができる(『鹿児島大学英語教育改革報告書<平成20年度—平成21年度前期>』 pp. 35-36)。関係する質問と結果をみてみよう。

資料 32 クラスのレベルに応じたコア英語推奨テキスト使用について

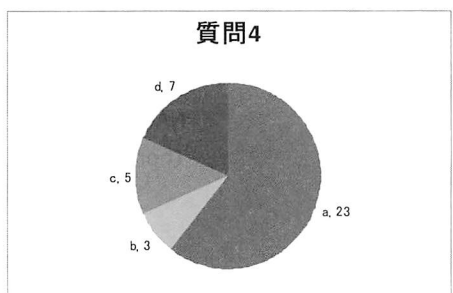


- (自分で選ぶ手間が省けるなどの理由で) 良いと思う(29%)
- (自分で選ぶ手間が省けるなどの理由で) どちらかといえば良いと思う(24%)
- (自分が使いたいテキストが自由に使えないなどの理由で) あまり良くないと思う(24%)
- (自分が使いたいテキストが自由に使えないなどの理由で) 良くないと思う(21%)

資料 32 のグラフ結果について: 推奨テキスト使用については a, b 合わせて 20 名(回答者全体の 53%) がポジティブな回答であり、17 名(回答者全体の 44%) がネガティブな回答である。推奨テキストという形でテキスト選択の縛りをつけていることに対しては、この時点ですでに、教員諸氏の心理的な抵抗感がある程度あるものと推測されていた。

続いて、希望テキスト申告制度についてのアンケート結果も確認しておく。

資料 33 コア英語推奨テキストに関して希望テキストの申告制度があることについて



- (自分が使いたいテキストが使える可能性があるので) 良いと思う(61%)
- (自分が使いたいテキストが使える可能性があるので) どちらかといえば良いと思う(8%)
- (その制度でも使用テキストを制限することには変わりはないので) あまり良くないと思う(13%)
- (その制度でも使用テキストを制限することには変わりはないので) 良くないと思う(18%)

資料 33 のグラフ結果について: 希望テキスト申告制度については a, b 合わせて 26 名(回答者全体の 69%) がポジティブな回答であり、12 名(回答者全体の 31%) がネガティブな回答である。このことから申告制度そのものは概ね教員の支持があるといえるが、3 割のネガティブな回答の背景には、必要に応じ希望テキストの申告制度を利用して、テキスト選定にあたっての教員の自由裁量を確保していきたいとの願いが隠れていることは想像に難くない。

その際、この申告制度を使って推奨外テキストを用いなければ授業ができない状況なのかどうかの判断が重要である。推奨テキストのリストをつぶさに検討してもなお選べないという状況がどのようなものであるのか、その説明が求められるところであるが、実際は、そのような真正面からの説明は見られず、本来の推奨テキストの是非には触れることなく、希望する特定の推奨外テキストの有効性について、推奨テキストとは関連のない何らかの根拠を示すものが全てである。またその点を、制度上の手続きを踏むとはいえ、掘り下げていけば、推奨テキスト制度自体の否定ともなりかねないため、微妙な側面を孕んでいる。習熟度別クラス編成を続ける以上、推奨テキスト制度を維持せざるを得ないが、そもそも鹿児島大学の推奨テキストは、科目ごとに 1 冊という具合には限定されてはならず、かなりの幅があり、レベルに応じて教員

がテキストを選べるようになっている。たとえば、22年度の推奨テキスト・リストは次のようなものである。

資料 34 教育センター推奨英語テキスト (22年度コア英語用)

<下線を施したテキストは22年度に新たに推奨テキストとして加えた分を示す>

v (上級); p(中級); h(初級); v-p (上級または中級); p-h (中級または初級)

コア U(21冊)

v	Talk with our Planet	Shohakusha
v	Power-Up English (Advanced)	NAN'UN-DO
v	<u>Channel Direct 6</u>	MM Publications
v	<u>The Devil Wears Prada</u>	Shohakusha
v	FOR and AGAINST	Seibido
v	<u>Insights 2010</u>	Kinseido
v-p	Global Transformation: Insights into Modern Economy & International Business	Seibido
v-p	<u>Channel Direct 5</u>	MM Publications
p	<u>What's Happening USA</u>	Kinseido
p	Reader's Ark	Kinseido
p	Power-Up English (Intermediate)	NAN'UN-DO
p	Celebrating Around the World	Kenkyusha
p-h	Catch the Winds of the Day: <i>How to read English Articles</i>	Shohakusha
p-h	World Link (Book 1) <i>Developing English Fluency</i>	Thomson
p-h	Cross-Streams	Sanshusha
p-h	Reader's Ark Basic	Kinseido
h	<u>Step up with movie English</u>	Kinseido
h	Famous Britons Past and Present	NAN'UN-DO
h	<u>The UK and the USA</u>	NAN'UN-DO
h	Power-Up English (Basic)	NAN'UN-DO
h	World Link (Intro) <i>Developing English Fluency</i>	Thomson

コア C(23冊)

v	Points to Paragraphs	Macmillan
v	Writing in English from basics to Paragraphs	Seibido
v	Writing Plus	Kinseido
v	Thoughts into Writing	Seibido
v	<u>Writing to Communicate 2</u>	PEARSON Longman
v	<u>Point by Point</u>	NAN'UN-DO
v-p	Read Better to Write Better	Kinseido
p	<u>Writing from Within</u>	Cambridge
p	Primary Course on Paragraph Writing	Seibido
p	English Writing for Global Communication	KINSEIDO
p	Writing Techniques for College Students	Kinseido
p	Simply Writing	Kinseido
p	Writing Updates: <i>A Grammar-Based Approach to English Writing</i>	Kinseido
p	Essential Writing Skills	NAN'UN-DO
p-h	Writing from Within Intro	Cambridge
p-h	English writing without tears	Shohakusha

h	<u>Get it Write</u>	Longman-Kirihara
h	Essential Grammar for Communication	Shohakusha
h	A Fresh Start For Your English Grammar	Shohakusha
h	Useful English for Communication	Shohakusha
h	Primer for English Writing	NAN'UN-DO
h	Basic College Writing With 5 Sentence Patterns	CENGAGE Learning
h	<u>Writing Gear</u>	KINSEIDO

コアR(20冊)

v	A Complete College Program	Kinseido
v	<u>Introduction to Academic Reading</u>	CENAGE Learning
v	Pathways to Knowledge	Seibido
v	Concepts and Comments	Shohakusha
v	Real-life Stories from the NY Times	Shohakusha
v	<u>Living in Japan</u>	Seibido
v-p	Climate Change : The Coming Crisis	CENGAGE Learning
v-p	Keywords for Japan Today	CENGAGE Learning
p	<u>Power reading 2</u>	Seibido
p	<u>Reading Crystalline</u>	Sanshusha
p	Profiles of the American Dream	Kinseido
p	Discoveries and Findings	Shohakusha
p	World Reports of Health and Environment from VOA	Shohakusha
p	Wonders of the World on the Web	NAN'UN-DO
p	Reading Explorer 2	HEINLE CENGAGE
p-h	Reading Explorer 1	HEINLE CENGAGE
h	Between the Lines	Shohakusha
h	<u>Power Reading 1</u>	Seibido
h	Ideas and Opinions	Shohakusha
h	Basic Interactive Reader	Kinseido

コアO(20冊)

v	Presenting Different Opinions	Nan'undo
v	<u>Present Yourself 2: Viewpoints</u>	Cambridge
v	Score Goals in TOEIC Test Listening 600	Shohakusha
v	What's on Japan 3	Kinseido
v-p	Impact Issues 2	PEARSON Longman
v-p	<u>Impact Listening 3</u>	PEARSON Longman
p	Travel Abroad Project	Nan'undo
p	<u>Fifty-fifty Book Two</u>	PEARSON Longman
p	Chatterbox	Nan'undo
p	<u>Speaking of Speech</u>	MACMILLAN
p	Score Goals in TOEIC Test Listening 500	Shohakusha
p	Impact Issues 1	PEARSON Longman
p-h	<u>Impact Listening 2</u>	PEARSON Longman
h	English Firsthand 2	PEARSON Longman
h	Time to Communicate	Nan'undo
h	Communication Now	Nan'undo

h	<u>English Firsthand 1</u>	PEARSON Longman
h	World Link Book 3	Thomson
h	Score Goals in TOEIC Test Listening 400	Shohakusha
h	<u>On Air</u>	Kinseido

22年度のコア英語用として全体で84冊のテキストが推奨されており、各科目20冊程度ずつが用意されている。コアのU, C, O, Rという科目別とv, p, hというレベル別を順守することが求められる。*

*22年度末をもって、インテンシブ英語と特別英語演習が廃止され、それに伴い、v0 (v プラス)とh3 (基礎) という二つのレベルクラスが23年度から設けられる。従来のv (上級)、p (中級)、h (初級) という3レベルの大枠は変わらないが、上級と初級に微調整を加えることとなる。

例えば、コアUであれば、v, p, hというレベル別のテキストとしてそれぞれ4~6冊が推奨されており、それぞれの推奨の幅の中で教員の自由裁量が発揮できる仕組みとなっている。v-p, p-hというのは、それぞれ、vレベルでもpレベルでも、pレベルでもhレベルでも、使用可という意味である。下線の付されたテキストは、22年度用にあらたに加えた推奨テキストである。つまり、22年度推奨テキストは、21年度版をベースとしながら、22年度用に新規に加えたテキストから成り立っている。新規に加わったテキスト数は、各科目5~7冊である。新規に加えるテキストについては、教育センターの英語作業部会において作業を進めることにしている。毎年10月から12月上旬頃までに大学テキスト出版会社から入手できる新刊テキストを中心に各科目につき基本的に二人の選定テキスト候補推薦委員が調査、検討、候補テキスト選びを行い、各科目ごとで話し合いをして候補として決めた推奨テキスト候補を英語作業部会に持ち寄り、審議し決定するという手順を踏んでいる。

テキストの選定基準としては、19年秋に20年度から始まる英語教育改革の基本的考え方に準拠している(『鹿児島大学英語教育改革報告書<平成20年度~平成21年度前期>』p.2)。すなわち、英語によるコミュニケーション能力の育成という狙いを大枠で据えている。この背景の一端には少なくとも、後にも触れる20年の中央教育審議会での答申があると思われる。

コアU: 読解、作文、オーラルの総合であるが、英語によるコミュニケーション能力育成の基礎としてのリスニングにそれまで以上の重点を置く。

コアC: 実質的にComposition & Grammarというクラスとし、作文の基礎としての、基本的構文構築力を高めることに重点を置く意味で、それまで以上に、文法力養成に力点を置いた授業内容とする。

コアO: 実質的にSpeaking & Listeningというクラスとし、スピーキングとリスニングの比重が同等になるようにする。

コアR: 読解

ここで推奨されているテキストは、ご覧の通り、国内外の英語テキスト出版会社によるものであるが、全出版会社のものを網羅的に精査し、その結果をここにあげているものではない。選定作業の時点で教育センター外国語教育推進部ならびに教育センター英語作業部会メンバーの目に触れ得たテキストの中から選ばせていただいているものである。全体としては、「スキルアップのための実用系テキスト」といってよい。

さらに鹿児島大学では、英語コア科目4種のそれぞれの学習目標と評価基準は、20年度の英語教育改革より、次のように据えられている。鹿児島大学の学生として共通教育の英語学習上、到達することが望ましいと考えられる語学力の具体的指標をその評価基準と共に設置科目ごとに明示したものである(学習目標の一部には、語句を要約して示している個所もある)。

資料 35 略号の解説：

C=コア C (作文) U=コア U (総合) O=コア O (オーラル) R=コア R (読解)

v: 上級 p: 中級 h: 初級

クラス	学習目標	評価基準
C v	<ol style="list-style-type: none"> 1. 英文構成力の基本となる文法・語法力を身につける。 2. 日常的な事柄や時事問題、アカデミックな話題に関する英語表現力を身につける。 3. 二行程度の和文英訳の力を身につける。 4. 複数のパラグラフでパッセージを構成する力を身につける。 	期末試験 80% (レポート等の課題を含む) G-TELP(国際英検)の文法部門の結果 20%
C p	<ol style="list-style-type: none"> 1. 英文構成力の基本となる文法・語法力を身につける。 2. 日常的な事柄や時事問題に関して基本的な英語表現力を身につける。 3. 一行から二行程度の和文英訳の力を身につける。 4. ワンパラグラフ(80- 100 語程度)の構成のしっかりした英文を書く力を身につける。 	期末試験 80% (レポート等の課題を含む) G-TELP(国際英検)の文法部門の結果 20%
C h	<ol style="list-style-type: none"> 1. 英文構成力の基本となる文法・語法力を身につける。 2. 日常的な事柄に関して基本的な英語表現力を身につける。 3. 一行程度の簡単な和文英訳の力を身につける。 4. ワンパラグラフ(50-70 語程度)の簡単で短い英文を書く力を身につける。 	期末試験 80% (レポート等の課題を含む) G-TELP(国際英検)の文法部門の結果 20%
U v	<ol style="list-style-type: none"> 1. 自己表現に必要な基本的な文法、語法、構文および段落構成の理解につとめる。 2. 自国&他国の文化事情の内容理解力(読解&聴解力)を身につける。 3. 800 語程度の文章を速読理解できるようにする。正しい音読も目指す。 4. 自分の考え(ex. 文化事情や社会情勢について)を、エッセイスタイルで論理的に書けるようにする。 	期末試験 80% (レポート等の課題を含む) G-TELP(国際英検)の文法・聴解・読解部門の結果 20%
U p	<ol style="list-style-type: none"> 1. 自己表現に必要な基本的な文法、語法、構文理解につとめる。 2. 自国&他国の文化事情の内容理解力(読解&聴解力)を身につける。 3. 500 語程度の文章を速読理解できるようにする。正しい音読も目指す。 4. 自分の考え(ex. 文化事情や社会情勢について)を1パラグラフ程度で論理的に書けるようにする。 	期末試験 80% (レポート等の課題を含む) G-TELP(国際英検)の文法・聴解・読解部門の結果 20%
U h	<ol style="list-style-type: none"> 1. 自己表現に必要な基本的な文法、語法、構文の理解につとめる。 2. 自国&他国の文化事情の内容理解力(読解&聴解力)を身につける。 3. 500 語程度の文章を速読理解できるようにする。正しい音読も目指す。 4. 自分の考え(ex. 文化事情や社会情勢について)を、1～数行程度の英文で書けるようにする。 	期末試験 80% (レポート等の課題を含む) G-TELP(国際英検)の文法・聴解・読解部門の結果 20%
O v	<ol style="list-style-type: none"> 1. 口頭による比較的高度な英語表現力を身につける。 2. 日常的な事柄や時事問題、アカデミックな話題に関する英語による口頭表現力を身につける。 3. 目標としては、英語検定準1級もしくは TOEIC 700 点以上である。 	期末試験 80% (レポート等の課題を含む) G-TELP(国際英検)の聴解部門の結果 20%

O p	<ol style="list-style-type: none"> 1. 口頭による中級レベルの英語表現能力を身に付ける。 2. 比較的取り扱いやすい中級レベルの日常的な事柄や時事問題、アカデミックな話題に関して、口頭による英語表現力を身につける。 3. 目標としては、英語検定 2 級、TOEIC 400—550 点程度である。 	期末試験 80% (レポート等の課題を含む) G-TELP(国際英検)の聴解部門の結果 20%
O h	<ol style="list-style-type: none"> 1. 口頭による基本レベルの英語表現能力を身に付ける。 2. 平易で取り扱いやすい基本レベルの日常的な事柄や時事問題、アカデミックな話題に関して、口頭による英語表現力を身につける。 3. 目標としては、英語検定準 2 級、TOEIC 400 点程度である。 	期末試験 80% (レポート等の課題を含む) G-TELP(国際英検)の聴解部門の結果 20%
R v	3,000 語から 4,000 語レベルの文章が読める。まとまった長さの文章が短時間で理解できる。	期末試験 80% (レポート等の課題を含む) G-TELP(国際英検)の読解部門の結果 20%
R p	2,000 語レベルの文章が読める。文章の構成パターン、主題、要点などをすばやく読み取れる。	期末試験 80% (レポート等の課題を含む) G-TELP(国際英検)の読解部門の結果 20%
R h	1,000 語レベルの文章が読める。ある程度まとまった長さの簡単な文章が読める。	期末試験 80% (レポート等の課題を含む) G-TELP(国際英検)の読解部門の結果 20%

これらの学習目標や評価基準の大枠として、『平成 22 年度 鹿児島大学 共通教育履修案内』には、共通教育における外国語教育に関する教育目標と学習目標を次のように明示している (p.2, p.4) :

教育目標 5 として、

国際化が進展する現代社会に適切に対応するため、外国語によるコミュニケーション能力を育成し、異文化に対する理解を深め、相互理解と相互協力を推進します。外国語教育では、単に外国語を活用するだけでなく、世界に共存する多様な諸文化と価値体系を理解する能力を高めることが求められています。

学習目標 3 として、

外国語コミュニケーション能力と異文化理解の教育

- 1) 外国語による表現能力を身につけ、諸文化と価値体系の多様性に対する理解を深め、自己の文化的基盤を自覚し、国際理解と交流に取り組むことができること
- 2) 海外研修を含む体験型学習に参加するとともに、多様な諸文化と言語を学ぶ機会に触れて、共生社会の実現に貢献できること
- 3) 外国人留学生は日本語の運用能力を高め、日本文化と日本社会に対する理解を深めること

また、外国語科目の内容と外国語コア科目、外国語オープン科目について、上掲『履修案内』では次のように説明している (同上、p.24) :

外国語科目

内容：多様な世界観の共存を認めあう国際環境が求められている現在、諸文化間の人的交流や情報交換がますます必要となっています。こうした時代の要請の中で、外国語教育は、共通教育における重要な科目のひとつとなっています。外国語教育の目標は、諸言語によって表現された内容を正確に理解し、その言語による表現能力を高め、諸文化と価値体系の多様性に対する理解を深め、自己の文化的基盤を自覚し、国際理解と交流の能力を養うことにあります。以上の目標を達成するために、次の科目が開設されます。

外国語コア科目：外国語の基礎能力を修得し、基本的な運用能力を養うことを目的とする授業です。各期週一回の授業をもって 1 単位となります。(ただし、独語・仏語・中国語・韓国語のコア授業科目は、週 2 回の授業をもって 2 単位となります)

外国語オープン科目：コア科目で修得した能力を応用・発展させることを目的とし、異文化理解、日常会話、時事外国語、専門外国語等を授業内容とします。各学期週 1 回の授業をもって 2 単位となります。

現行の英語カリキュラムにおけるコア英語は、次のように記されている(上掲『平成 22 年度版履修案内』p.26)：

コア英語：コアの授業は一般的な英語の運用力を「読む」、「書く」、「聴く」、「話す」、の 4 技能にわたって養成することを目標とするもので、学生は定められたクラスで授業を受けなければなりません。(…)なお、授業科目名のアルファベットは授業内容を示すものであり、Rは講読、Oはオーラル・コミュニケーション、Cは英作文、Uは総合英語です。コア英語はすべて習熟度別クラス編成になります。…(習熟度のレベル表記は、上級=v, 中級=p, 初級=h です。…)

このような現行の 22 年度版履修案内に記されている外国語教育に関する考え方は、次のような、鹿児島大学教養部解体前後の学内における協議結果の指針に端を発しているものと思われる。

現行のコア・オープン英語のカリキュラムが共通教育のもとで発足するのが平成 8 年であるが、その準備段階の平成 7 年 3 月、組織改革専門部会教育分科会の報告として外国語の教育目標は次の 5 項目が提示されていた(cf. 「共通教育外国語カリキュラムの改革案」p.1, 18 年 7 月、鹿児島大学教育センター外国語教育推進部長 富岡龍明手稿)

- 1) 言語体系を理解するための総合的な知識
- 2) 目標言語を用いてのコミュニケーション能力
- 3) 目標言語の文化的背景に関する知識
- 4) 多様な価値体系をもつ諸文化を、広い視野のもとに理解する力
- 5) 外国語を用いて、積極的に国際交流に貢献し、地域社会の発展に寄与できる力

また、教養部解体の前年、平成 7 年 8 月に当時の教養部英語科による報告書には、コアクラスとオープンクラスの到達目標は次のように明記されていた(cf.前掲手稿、p. 2)：

コアクラスの到達目標：

基礎的コミュニケーション能力の養成

- 1) 一般的な日常会話力(例：電話をかける、簡単な報告・発表等ができる・聞ける)
- 2) 一般的作文力(例：手紙、説明文等を書くことができる)
- 3) 一般的読解力(例：新聞や手紙、説明書を読むことができる)

(オープンクラスについても、今後の学内議論等に備え、ここに記しておく：)
オープンクラスの到達目標 (授業ごとに大きく異なる)

- (1) ディスカッション、ディベートなどの高度な会話力の養成
- (2) 各種検定試験の合格
- (3) 留学のための英語運用力の涵養
- (4) 高度なマスコミ英語の理解力養成
 - ・ BBC ニュースや Times の社説等、マスコミで使用される難易度の高い英語
- (5) 異文化への理解を深める
 - ・ 外国人の日本理解、日本文化紹介、留学生との共同授業など
- (6) 分野別英語
 - ・ 専門的な文章の大意理解・内容把握等の発展的読解力の養成
- (7) 専門英語 (学部教員の協力がある場合)
- (8) その他

こうした一連の流れをみると、資料 35 で示した、英語コア科目 4 種のそれぞれの学習目標と評価基準は、鹿児島大学の学生として共通教育の英語学習上、到達することが望ましいと考えられる語学力の指標とその評価基準が、具体的に示されており、推奨テキスト制度で挙げられているようなテキストを用いることにより、一定の成果を可視的にとらえることが期待できる枠組みであると考えられる。

ただし、コア U は、読解、作文、オーラル・コミュニケーションの総合という性質を有し、そのような総合的な英語学習へのアプローチに特色がある科目ではあるが、他のコア C、O、R のクラスとのバランスや連動性を考えた場合、絞りを利かせる方向で改善の余地があるように思われる。この件は、後に 4-2 の節で、あらためて触れることとする。

ここまで、推奨テキスト制度 (テキスト選択における一定の制約) に対する本質的な心理的抵抗感 (自由裁量志向の拡大化) の指摘に端を発して、その周辺状況を述べてきた。

さて、現行の推奨テキスト制度の「揺れ」の問題の原因と考えられる前掲(2)に戻ろう。それは、テキスト使用の縛りに対する心理的抵抗感の背景にあると思われる、外国語教育・英語教育の理念・目標に対する全学コンセンサスの脆弱性の問題である。これは、鹿児島大学の英語の授業では、何を目標として、何をどのように教え、その授業の結果として何を評価すべきなのか、という、日本の英語教育全体にも通じる根本問題である。大学で使用するテキストはどうあるべきか、という問題にも当然つながってくる。

例えば、実用か教養か、という日本の英語教育目標・目的論をめぐる大きなテーマも、鹿児島大学において基本的合意は実質的にまだとれていない側面があると思われる。これは問題設定の方法が重要である。これまでの日本での議論にみられてきたとおり、この両者を二項対立、二律背反的にとらえる限り、決着をつけるのは困難であろう。実用と教養が渾然一体となっているという見方もあるわけで、渾然の部分を、程度性的問題として捉え、実用と教養との調和のバランスを考える向きもあろう。つまり、合意を目指すのは、英語教育・学習の実用的価値と教養的価値のいずれかをとるというのではなく、この両者は渾然一体としているという認識から始めてもよい。同時に、もう一言、語弊を恐れずに敢えて言えば、要は、英語教育のマテリアルが何であれ、教師が学生より何年か長く生きて何がしかを多く学んでいることを背景として、教師が学生に対して体当たりの覚悟で熱心に一所懸命に教えること、限られた時間のなかであっても精一杯の時間と努力を費やして、教師と学生とが一所懸命に学ぶ熱心さを共有しあうことが大切なかもしれない。教育の本質が人格の関わり合いであるとすれば、教師の人格が英語授業で学生達一人ひとりの人格とどう関わり合うかが問われているように思われる。人間は教育を行い、教育を受ける稀有な動物であるが、そうした教育を通じて、教育に関する考え方もまたさまざまである。しかし、それぞれの信念を持ちつつも、組織としての教育活動における大枠の合意に従いつつ、個々の信念と情熱を傾けていけたらまことに幸いである。

また、国策としての日本の基本的考え方（たとえば、「中央教育審議会大学分科会制度・教育部会「審議のまとめ」の骨子「学士課程教育の構築に向けて」平成20年3月25日」）では、外国語教育において「バランスのとれたコミュニケーション能力の育成」が掲げられている。さらに、各専攻分野を通じて日本の学士課程教育が共通して目指す「学習成果」に関する参考指針として、「学士力」が指摘され、その汎用的技能のひとつとして、「日本語と特定の外国語を用いて、読み、書き、聞き、話すことができる」、という「コミュニケーション・スキル」が挙げられている。そのスキルは活用しなければ意味が薄れるわけで、当然、同じ学士力に挙げられている、多文化・異文化、人類の文化、社会と自然に関する「知識・理解」や他者とのチームワークやリーダーシップ、さらに「総合的な学習経験と創造的思考力」等に活かされなければならないであろう。こうした状況下では、実用価値と教養価値の対立は生産的な議論にはなかなかないと思われる。このように、推奨テキスト制度の在り方は、深層では英語教育の根本的な課題と関連があり、今後も、一層幅広く英語教育に関するコンセンサスが得られるよう努力や工夫が求められている。

4-2 英語カリキュラムについて

すでに前節でもカリキュラムの中身について多かれ少なかれ触れているが、現行カリキュラム、とりわけ英語コア・カリキュラムの現況の一端を簡単に述べておきたい。2年次の英語オープン、ならびに専門課程での専門英語との関係で考察されるべき2年次以降の英語学習の継続性の問題はここでは触れない。

現行の英語カリキュラムにおけるコア英語については、内容の概要も含めて前節にて触れたが、その前後期ごとの配分は次のようである：

1年次	前期	英語コアU	(総合)
		英語コアC	(作文)
	後期	英語コアR	(読解)
		英語コアO	(オーラル・コミュニケーション)

このような枠組みのコア英語の中で、本学でも何度か指摘されているように、英語コアUの取扱いが課題の一つとして挙げられる。英語コアUは、いわゆる総合英語(Integrated Approach to English)で、オーラル・コミュニケーション、読解、英作文が全て関わるクラスである。そのような点にこそ特色が期待されている科目であるのだが、目標に幅があり、全体の学習効果を上げていく具体的指導が容易ではないとの声が少なくない。絞りを利かせる方向で、改善の余地があるように思われる。コアUの推奨テキストを見ても、読み、書き、聞き、話すという4技能を薄く広くという方針で編集されているものがほとんどである。概して、読解をメインにしながらも、他に、語彙、内容把握、作文、リスニング、口頭発表や発音練習への促し、といった構成が多い。クラスの現場では、習熟度別クラスの状況に応じて適宜、工夫がほどこされているようである。あるクラスでは、毎週一回90分の授業でリスニングを重点指導すると同時に4技能を広く薄く扱うことで、英語力を維持するウォーミングアップとする。また他のあるクラスでは、リスニングを重点指導すると同時に、担当教師の判断で、他の読解、語彙、作文、スピーキングのいずれかを第二の重点指導項目とする、といった具合に、コアUというクラスの実質的な中身にかなりの幅が生じている点は否めないようである。

コアUは、前述のとおり、読解、作文、オーラル・コミュニケーションという総合的な英語学習へのアプローチにこそ特色がある科目としてカリキュラムに位置付けられたわけであろうが、他のコアC、O、Rのクラスとのバランスや連動性を考えた場合、今後、見直していかねばならない英語コア・カリキュラム上の課題の1つであろう。

5. 結語 — 21年度と22年度の2年間の総括と今後の展望

20年度以来、本学で実践している英語教育改革も3年が経過し、改革に係わる様々なデータ蓄積が進んできており、それらは本報告書でも随所で紹介している。

改革状況の可視化が大きく進捗したのは一つには共通アチーブメントテスト（G-TELP）の導入によるところが大きい。G-TELP導入当初は「皮相な言語スキルを測るような実用英語テストは大学英語教育に合わない」などの反対意見もあったが、3年を経て定着してきた感がある。しかし、それで何も問題なしというわけではなく、そもそも鹿児島大学の大学英語教育はどうあるべきかという根本のところについての全学コンセンサスが十分でない、という現況はまだ未解決の問題として残っている。G-TELP導入に際して上記のような意見が出たことも、裏を返せば大学の英語教育とは何か、ということでの考え方のまとまりの欠如に起因していたとも言える。

本報告でも触れたように、テキスト選択や授業のあり方等、教育に係わる教員の裁量という古くて新しい問題についても今後全学レベルで議論を深めていく必要がある。改革のための改革にならないよう、学生の英語能力、学習意欲をどう高めていくのかという最も基本的な課題に今後も鋭意取り組んでいくことが求められている。

最後に、本報告書の執筆は項目ごとに下記の鹿児島大学教育センター教員がそれぞれ分担した。

（敬称略）

1. 1-1～1-5：村山陽平
1-6：John Tremarco
1-7：金岡正夫
1-8：Anne Brasier
2. 富岡龍明
3. 富岡龍明
4. 高橋玄一郎

また、G-TELP結果のデータ作成に当たっては、G-TELP日本事務局の福井拓氏にご尽力頂きました。ここに深く感謝致します。

巻末データ

資料3の詳細データ

- 検定方法：t-検定（一对の標本による平均の検定ツール）
- 実施テスト：G-TELP 前期6月実施（Form313） 後期12月実施（Form315）
- 対象者：21年度のG-TELPを前期（6月）、後期（8月）ともに受験した全受験生
- 帰無仮説：「前期試験の平均点と後期試験の平均点には有意差は無い」
- 判断基準
 $P(T \leq t)$ 両側 < 有意水準 (0.05) ⇒ 棄却 ⇒ 「有意差が無い」とはいえない ⇒ 有意差が有る
 $P(T \leq t)$ 両側 > 有意水準 (0.05) ⇒ 採択 ⇒ 有意差が無い
 ※両側検定にて判断

t-検定結果

帰無仮説：テスト間の平均点の差には有意差がない
 帰無仮説を採択 ⇒ 有意差がない
 帰無仮説を棄却 ⇒ 有意差がないとはいえない ⇒ 有意差がある

t-検定：一对の標本による平均の検定ツール

21年前期・21年後期

	TTL(G+L+R)	TTL(G+L+R)
平均	158.203116	171.6428159
分散	992.1019071	1161.944517
観測数	1733	1733
ピアソン相関	0.702453308	
仮説平均との差異	0	
自由度	1732	
t	-22.01879503	
P(T<=t) 片側	3.08623E-95	
t 境界値 片側	1.645733875	
P(T<=t) 両側	6.17247E-95	
t 境界値 両側	1.961334548	
検定結果 P(T<=t) < 0.05	⇒ よって、仮説は棄却 ⇒ 有意差がある	

	GRM	GRM
平均	60.20311598	68.54472014
分散	272.0672651	283.5333627
観測数	1733	1733
ピアソン相関	0.550904357	
仮説平均との差異	0	
自由度	1732	
t	-21.98069149	
P(T<=t) 片側	5.95054E-95	
t 境界値 片側	1.645733875	
P(T<=t) 両側	1.19011E-94	
t 境界値 両側	1.961334548	
検定結果 P(T<=t) < 0.05	⇒ よって、仮説は棄却 ⇒ 有意差がある	

	LST	LST
平均	41.60242354	47.39930756
分散	104.6172459	134.8797224
観測数	1733	1733
ピアソン相関	0.276735599	
仮説平均との差異	0	
自由度	1732	
t	-18.30755726	
P(T<=t) 片側	6.96053E-69	
t 境界値 片側	1.645733875	
P(T<=t) 両側	1.39211E-68	
t 境界値 両側	1.961334548	
検定結果 P(T<=t) < 0.05	⇒ よって、仮説は棄却 ⇒ 有意差がある	

	RDG	RDG
平均	56.39757646	55.69878823
分散	226.4451904	215.6909743
観測数	1733	1733
ピアソン相関	0.604505374	
仮説平均との差異	0	
自由度	1732	
t	2.199370394	
P(T<=t) 片側	0.013991665	
t 境界値 片側	1.645733875	
P(T<=t) 両側	0.027983331	
t 境界値 両側	1.961334548	
検定結果 P(T<=t) < 0.05	⇒ よって、仮説は棄却 ⇒ 有意差がある	

資料4の詳細データ

- 検定方法：t-検定（一対の標本による平均の検定ツール）
- 実施テスト：G-TELP 前期6月実施 (Form313) 後期12月実施 (Form315)
- 対象者：22年度のG-TELPを前期(6月)、後期(8月)ともに受験した全受験生
- 帰無仮説：「前期試験の平均点と後期試験の平均点には有意差は無い」
- 判断基準
 $P(T \leq t)$ 両側 < 有意水準 (0.05) ⇒ 棄却 ⇒ 「有意差が無い」とはいえない ⇒ 有意差が有る
 $P(T \leq t)$ 両側 > 有意水準 (0.05) ⇒ 採択 ⇒ 有意差が無い
 ※両側検定にて判断

■TTL

	前期	後期	平均点差
平均	157.5	170.9	13.4
分散	1021.687	1159.493	
観測数	1724	1724	
ピアソン相関	0.691854477		
仮説平均との差異	0		
自由度	1723		
t	-21.4745681		
$P(T \leq t)$ 片側	3.85656E-91		
t 境界値 片側	1.645738476		
$P(T \leq t)$ 両側	7.71313E-91		
t 境界値 両側	1.961341713		

検定結果
 $P(T \leq t)$ 両側 < 0.05 ⇒ よって、仮説は棄却
 平均点の差 (+13.4) は有意差が有るといえる

■LST

	前期	後期	平均点差
平均	41.38573086	47.23781903	5.9
分散	112.862733	138.7269264	
観測数	1724	1724	
ピアソン相関	0.289981333		
仮説平均との差異	0		
自由度	1723		
t	-18.1605434		
$P(T \leq t)$ 片側	7.08938E-68		
t 境界値 片側	1.645738476		
$P(T \leq t)$ 両側	1.41788E-67		
t 境界値 両側	1.961341713		

検定結果
 $P(T \leq t)$ 両側 < 0.05 ⇒ よって、仮説は棄却
 平均点の差 (+5.9) は有意差が有るといえる

■GRM

	前期	後期	平均点差
平均	59.5974478	67.84164733	8.2
分散	270.2870742	290.6394485	
観測数	1724	1724	
ピアソン相関	0.55804709		
仮説平均との差異	0		
自由度	1723		
t	-21.73179855		
$P(T \leq t)$ 片側	4.82127E-93		
t 境界値 片側	1.645738476		
$P(T \leq t)$ 両側	9.64253E-93		
t 境界値 両側	1.961341713		

検定結果
 $P(T \leq t)$ 両側 < 0.05 ⇒ よって、仮説は棄却
 平均点の差 (+8.2) は有意差が有るといえる

■RDG

	前期	後期	平均点差
平均	56.49477958	55.83700696	-0.7
分散	232.9848828	216.5764358	
観測数	1724	1724	
ピアソン相関	0.561331087		
仮説平均との差異	0		
自由度	1723		
t	1.9440009		
$P(T \leq t)$ 片側	0.026028964		
t 境界値 片側	1.645738476		
$P(T \leq t)$ 両側	0.052057928		
t 境界値 両側	1.961341713		

検定結果
 $P(T \leq t)$ 両側 > 0.05 ⇒ よって、仮説は採択
 平均点の差 (-0.7) は有意差は無い

《検定結果》

2010年度のG-TELPの前期試験と後期試験の平均点の差をt-検定を用いて検証した。

結果としては、TTL (+13.4)、GRM (+8.2)、LST (+5.9)、RDG (-0.7) というそれぞれの項目の前期試験から後期試験に掛けての平均点の差(推移)のうち、TTL、GRM、LSTの差には「有意差がある」、RDGの差に関しては、「有意差がない」との結果となった。「有意差」とは、「偶然に起こる可能性が極めて少ない差」、「意味のある差」であり、今回でいえば、「受験者の英語能力に、意味のある明確な差」があったということである。

上記を踏まえると今回のG-TELP結果から

GRM、LSTでは受験者の有意差をもって、英語能力が向上した。逆にRDGでは英語能力が若干低下したが、統計的な有意差は見られなかった。総合的(TTL)には、受験者の英語能力は向上したと統計的に云うことができる。

資料5の詳細データ

- 検定方法：t-検定（一対の標本による平均の検定ツール）
- 実施テスト：G-TELP 前期6月実施（Form313） 後期12月実施（Form315）
- 対象者：21年度のG-TELPを前期（6月）、後期（8月）ともに受験した全受験生
- 帰無仮説：「前期試験の平均点と後期試験の平均点には有意差は無い」
- 判断基準 P(T<=t) 両側<有意水準（0.05）⇒棄却⇒「有意差が無い」とはいえない⇒有意差が有る
P(T<=t) 両側>有意水準（0.05）⇒採択⇒有意差が無い ※ 両側検定にて判断

医学部（医学科）

■TTL

	前期	後期	平均点差
平均	212.9	228.2	15.3
分散	491.126	454.703	
観測数	58	58	
ピアソン相関	0.65661144		
仮説平均との差異	0		
自由度	57		
t	-6.4799115		
P(T<=t) 片側	1.1641E-08		
t 境界値 片側	1.67202889		
P(T<=t) 両側	2.3281E-08		
t 境界値 両側	2.00246544		

検定結果
P(T<=t)両側<0.05 ⇒ よって、仮説は棄却
平均点の有意差が有るといえる

■LST

	前期	後期	平均点差
平均	52.3103448	58.8793103	6.6
分散	121.937084	146.950091	
観測数	58	58	
ピアソン相関	0.47564169		
仮説平均との差異	0		
自由度	57		
t	-4.2049364		
P(T<=t) 片側	4.662E-05		
t 境界値 片側	1.67202889		
P(T<=t) 両側	9.3241E-05		
t 境界値 両側	2.00246544		

検定結果
P(T<=t)両側<0.05 ⇒ よって、仮説は棄却
平均点の有意差が有るといえる

医学部（保健学科）

■TTL

	前期	後期	平均点差
平均	157.9	181.5	23.6
分散	687.061	511.788	
観測数	87	87	
ピアソン相関	0.479934978		
仮説平均との差異	0		
自由度	86		
t	-8.771535609		
P(T<=t) 片側	7.18194E-14		
t 境界値 片側	1.66276545		
P(T<=t) 両側	1.43639E-13		
t 境界値 両側	1.987934166		

検定結果
P(T<=t)両側<0.05 ⇒ よって、仮説は棄却
平均点の有意差が有るといえる

■LST

	前期	後期	平均点差
平均	39.94252874	48.70114943	8.8
分散	96.33386795	93.88639401	
観測数	87	87	
ピアソン相関	0.358427621		
仮説平均との差異	0		
自由度	86		
t	-7.394930325		
P(T<=t) 片側	4.3543E-11		
t 境界値 片側	1.66276545		
P(T<=t) 両側	8.70859E-11		
t 境界値 両側	1.987934166		

検定結果
P(T<=t)両側<0.05 ⇒ よって、仮説は棄却
平均点の有意差が有るといえる

■GRM

	前期	後期	平均点差
平均	81.46551724	89.60344828	8.1
分散	110.1128252	71.43647913	
観測数	58	58	
ピアソン相関	0.494662471		
仮説平均との差異	0		
自由度	57		
t	-6.39903578		
P(T<=t) 片側	1.58428E-08		
t 境界値 片側	1.67202889		
P(T<=t) 両側	3.16856E-08		
t 境界値 両側	2.002465444		

検定結果
P(T<=t)両側<0.05 ⇒ よって、仮説は棄却
平均点の有意差が有るといえる

■RDG

	前期	後期	平均点差
平均	79.10344828	79.74137931	0.6
分散	121.5329704	84.37053842	
観測数	58	58	
ピアソン相関	0.351280967		
仮説平均との差異	0		
自由度	57		
t	-0.41850925		
P(T<=t) 片側	0.33857377		
t 境界値 片側	1.67202889		
P(T<=t) 両側	0.67714754		
t 境界値 両側	2.002465444		

検定結果
P(T<=t)両側>0.05 ⇒ よって、仮説は採択
平均点の有意差は無い

■GRM

	前期	後期	平均点差
平均	59.8045977	74.22988506	14.4
分散	257.7404437	163.8302593	
観測数	87	87	
ピアソン相関	0.400231453		
仮説平均との差異	0		
自由度	86		
t	-8.391627138		
P(T<=t) 片側	4.25401E-13		
t 境界値 片側	1.66276545		
P(T<=t) 両側	8.50801E-13		
t 境界値 両側	1.987934166		

検定結果
P(T<=t)両側<0.05 ⇒ よって、仮説は棄却
平均点の有意差が有るといえる

■RDG

	前期	後期	平均点差
平均	58.16091954	58.57471264	0.4
分散	165.6017108	106.8751671	
観測数	87	87	
ピアソン相関	0.22383733		
仮説平均との差異	0		
自由度	86		
t	-0.264505582		
P(T<=t) 片側	0.39601162		
t 境界値 片側	1.66276545		
P(T<=t) 両側	0.79202324		
t 境界値 両側	1.987934166		

検定結果
P(T<=t)両側>0.05 ⇒ よって、仮説は採択
平均点の有意差は無い

教育学部

■TTL

	前期	後期	平均点差
平均	154.2	166.0	11.7
分散	885.031	997.117	
観測数	273	273	
ピアソン相関	#N/A		
仮説平均との差異	0		
自由度	272		
t	-7.569219571		
P(T<=t) 片側	2.92332E-13		
t 境界値 片側	1.650474965		
P(T<=t) 両側	5.84664E-13		
t 境界値 両側	1.968723788		

検定結果
 $P(T \leq t)$ 両側 $< 0.05 \Rightarrow$ よって、仮説は棄却
 平均点の有意差が有るといえる

■LST

	前期	後期	平均点差
平均	41.0989011	45.81684982	4.7
分散	105.5232708	131.9369209	
観測数	273	273	
ピアソン相関	0.252006646		
仮説平均との差異	0		
自由度	272		
t	-5.843011335		
P(T<=t) 片側	7.30827E-09		
t 境界値 片側	1.650474965		
P(T<=t) 両側	1.46165E-08		
t 境界値 両側	1.968723788		

検定結果
 $P(T \leq t)$ 両側 $< 0.05 \Rightarrow$ よって、仮説は棄却
 平均点の有意差が有るといえる

工学部

■TTL

	前期	後期	平均点差
平均	148.9	159.1	10.3
分散	729.843	776.753	
観測数	428	428	
ピアソン相関	0.542247571		
仮説平均との差異	0		
自由度	427		
t	-8.074327712		
P(T<=t) 片側	3.4923E-15		
t 境界値 片側	1.648429975		
P(T<=t) 両側	6.9846E-15		
t 境界値 両側	1.96553509		

検定結果
 $P(T \leq t)$ 両側 $< 0.05 \Rightarrow$ よって、仮説は棄却
 平均点の有意差が有るといえる

■LST

	前期	後期	平均点差
平均	39.82242991	43.88551402	4.1
分散	93.06441375	107.1507967	
観測数	428	428	
ピアソン相関	0.11872178		
仮説平均との差異	0		
自由度	427		
t	-6.327033965		
P(T<=t) 片側	3.15999E-10		
t 境界値 片側	1.648429975		
P(T<=t) 両側	6.31998E-10		
t 境界値 両側	1.96553509		

検定結果
 $P(T \leq t)$ 両側 $< 0.05 \Rightarrow$ よって、仮説は棄却
 平均点の有意差が有るといえる

■GRM

	前期	後期	平均点差
平均	58.63736264	66.58608059	7.9
分散	244.4305107	261.9346585	
観測数	273	273	
ピアソン相関	0.476705529		
仮説平均との差異	0		
自由度	272		
t	-8.065944538		
P(T<=t) 片側	1.16766E-14		
t 境界値 片側	1.650474965		
P(T<=t) 両側	2.33532E-14		
t 境界値 両側	1.968723788		

検定結果
 $P(T \leq t)$ 両側 $< 0.05 \Rightarrow$ よって、仮説は棄却
 平均点の有意差が有るといえる

■RDG

	前期	後期	平均点差
平均	54.50915751	53.57509158	-0.9
分散	203.1552467	192.5393773	
観測数	273	273	
ピアソン相関	0.558007386		
仮説平均との差異	0		
自由度	272		
t	1.16673606		
P(T<=t) 片側	0.122169433		
t 境界値 片側	1.650474965		
P(T<=t) 両側	0.244338866		
t 境界値 両側	1.968723788		

検定結果
 $P(T \leq t)$ 両側 $> 0.05 \Rightarrow$ よって、仮説は採択
 平均点の有意差は無い

■GRM

	前期	後期	平均点差
平均	57.51635514	63.80841121	6.3
分散	257.5383736	234.8484537	
観測数	428	428	
ピアソン相関	0.406829411		
仮説平均との差異	0		
自由度	427		
t	-7.61400743		
P(T<=t) 片側	8.61304E-14		
t 境界値 片側	1.648429975		
P(T<=t) 両側	1.72261E-13		
t 境界値 両側	1.96553509		

検定結果
 $P(T \leq t)$ 両側 $< 0.05 \Rightarrow$ よって、仮説は棄却
 平均点の有意差が有るといえる

■RDG

	前期	後期	平均点差
平均	51.54205607	51.43925234	-0.1
分散	172.1645035	165.5021559	
観測数	428	428	
ピアソン相関	0.427525456		
仮説平均との差異	0		
自由度	427		
t	0.152959708		
P(T<=t) 片側	0.439251152		
t 境界値 片側	1.648429975		
P(T<=t) 両側	0.878502304		
t 境界値 両側	1.96553509		

検定結果
 $P(T \leq t)$ 両側 $> 0.05 \Rightarrow$ よって、仮説は採択
 平均点の有意差は無い

歯学部

■TTL

	前期	後期	平均点差
平均	194.9	207.3	12.4
分散	778.885	1181.351	
観測数	22	22	
ピアソン相関	0.550130299		
仮説平均との差異	0		
自由度	21		
t	-1.934947067		
P(T<=t) 片側	0.033290159		
t 境界値 片側	1.720742871		
P(T<=t) 両側	0.066580317		
t 境界値 両側	2.079613837		

検定結果
P(T<=t)両側>0.05 ⇒ よって、仮説は採択
平均点の差は有意差は無い

■LST

	前期	後期	平均点差
平均	45.59090909	54.90909091	9.3
分散	109.3961039	249.2294372	
観測数	22	22	
ピアソン相関	0.427157938		
仮説平均との差異	0		
自由度	21		
t	-2.963141498		
P(T<=t) 片側	0.003710178		
t 境界値 片側	1.720742871		
P(T<=t) 両側	0.007420355		
t 境界値 両側	2.079613837		

検定結果
P(T<=t)両側<0.05 ⇒ よって、仮説は棄却
平均点の差は有意差が有るといえる

水産学部

■TTL

	前期	後期	平均点差
平均	139.7	155.1	15.4
分散	691.663	971.136	
観測数	136	136	
ピアソン相関	0.576019457		
仮説平均との差異	0		
自由度	135		
t	-6.720585076		
P(T<=t) 片側	2.32234E-10		
t 境界値 片側	1.656219133		
P(T<=t) 両側	4.64467E-10		
t 境界値 両側	1.977692248		

検定結果
P(T<=t)両側<0.05 ⇒ よって、仮説は棄却
平均点の差は有意差が有るといえる

■LST

	前期	後期	平均点差
平均	39.35294118	45.03676471	5.7
分散	101.4004357	116.4504902	
観測数	136	136	
ピアソン相関	0.046506092		
仮説平均との差異	0		
自由度	135		
t	-4.59881639		
P(T<=t) 片側	4.83458E-06		
t 境界値 片側	1.656219133		
P(T<=t) 両側	9.66916E-06		
t 境界値 両側	1.977692248		

検定結果
P(T<=t)両側<0.05 ⇒ よって、仮説は棄却
平均点の差は有意差が有るといえる

■GRM

	前期	後期	平均点差
平均	76.59090909	82.72727273	6.1
分散	104.8246753	167.9220779	
観測数	22	22	
ピアソン相関	0.370240064		
仮説平均との差異	0		
自由度	21		
t	-2.178809828		
P(T<=t) 片側	0.020440405		
t 境界値 片側	1.720742871		
P(T<=t) 両側	0.040880809		
t 境界値 両側	2.079613837		

検定結果
P(T<=t)両側<0.05 ⇒ よって、仮説は棄却
平均点の差は有意差が有るといえる

■RDG

	前期	後期	平均点差
平均	72.68181818	69.63636364	-3.0
分散	206.6082251	171.8614719	
観測数	22	22	
ピアソン相関	0.639716823		
仮説平均との差異	0		
自由度	21		
t	1.218719113		
P(T<=t) 片側	0.118232528		
t 境界値 片側	1.720742871		
P(T<=t) 両側	0.236465057		
t 境界値 両側	2.079613837		

検定結果
P(T<=t)両側>0.05 ⇒ よって、仮説は採択
平均点の差は有意差は無い

■GRM

	前期	後期	平均点差
平均	52.88970588	61.30882353	8.4
分散	225.9655229	277.5039216	
観測数	136	136	
ピアソン相関	0.521558587		
仮説平均との差異	0		
自由度	135		
t	-6.308049719		
P(T<=t) 片側	1.87736E-09		
t 境界値 片側	1.656219133		
P(T<=t) 両側	3.75471E-09		
t 境界値 両側	1.977692248		

検定結果
P(T<=t)両側<0.05 ⇒ よって、仮説は棄却
平均点の差は有意差が有るといえる

■RDG

	前期	後期	平均点差
平均	47.41911765	48.76470588	1.3
分散	140.2452614	194.5812636	
観測数	136	136	
ピアソン相関	0.497614841		
仮説平均との差異	0		
自由度	135		
t	-1.202045242		
P(T<=t) 片側	0.115725142		
t 境界値 片側	1.656219133		
P(T<=t) 両側	0.231450285		
t 境界値 両側	1.977692248		

検定結果
P(T<=t)両側>0.05 ⇒ よって、仮説は採択
平均点の差は有意差は無い

農学部

■TTL

	前期	後期	平均点差
平均	157.9	173.6	15.6
分散	904.393	1012.925	
観測数	208	208	
ピアソン相関	0.662036917		
仮説平均との差異	0		
自由度	207		
t	-8.849592539		
P(T<=t) 片側	1.9706E-16		
t 境界値 片側	1.652248086		
P(T<=t) 両側	3.9412E-16		
t 境界値 両側	1.971490344		

検定結果
 $P(T \leq t)$ 両側 $< 0.05 \Rightarrow$ よって、仮説は棄却
 平均点の差は有意差が有るといえる

■LST

	前期	後期	平均点差
平均	40.98557692	48.54807692	7.6
分散	99.48288276	118.4517837	
観測数	208	208	
ピアソン相関	0.229350191		
仮説平均との差異	0		
自由度	207		
t	-8.411244145		
P(T<=t) 片側	3.29895E-15		
t 境界値 片側	1.652248086		
P(T<=t) 両側	6.5979E-15		
t 境界値 両側	1.971490344		

検定結果
 $P(T \leq t)$ 両側 $< 0.05 \Rightarrow$ よって、仮説は棄却
 平均点の差は有意差が有るといえる

法文学部

■TTL

	前期	後期	平均点差
平均	173.1	187.0	13.8
分散	701.764	865.145	
観測数	335	335	
ピアソン相関	0.646163967		
仮説平均との差異	0		
自由度	334		
t	-10.70633586		
P(T<=t) 片側	1.70743E-23		
t 境界値 片側	1.649428568		
P(T<=t) 両側	3.41486E-23		
t 境界値 両側	1.967091894		

検定結果
 $P(T \leq t)$ 両側 $< 0.05 \Rightarrow$ よって、仮説は棄却
 平均点の差は有意差が有るといえる

■LST

	前期	後期	平均点差
平均	43.77014925	51.07164179	7.3
分散	90.80629189	111.8750916	
観測数	335	335	
ピアソン相関	0.358108541		
仮説平均との差異	0		
自由度	334		
t	-11.69879156		
P(T<=t) 片側	4.97029E-27		
t 境界値 片側	1.649428568		
P(T<=t) 両側	9.94059E-27		
t 境界値 両側	1.967091894		

検定結果
 $P(T \leq t)$ 両側 $< 0.05 \Rightarrow$ よって、仮説は棄却
 平均点の差は有意差が有るといえる

■GRM

	前期	後期	平均点差
平均	61.03365385	69.52403846	8.5
分散	263.8974127	274.3182599	
観測数	208	208	
ピアソン相関	0.525925038		
仮説平均との差異	0		
自由度	207		
t	-7.665000702		
P(T<=t) 片側	3.40924E-13		
t 境界値 片側	1.652248086		
P(T<=t) 両側	6.81847E-13		
t 境界値 両側	1.971490344		

検定結果
 $P(T \leq t)$ 両側 $< 0.05 \Rightarrow$ よって、仮説は棄却
 平均点の差は有意差が有るといえる

■RDG

	前期	後期	平均点差
平均	55.88942308	55.48076923	-0.4
分散	210.321047	212.0575994	
観測数	208	208	
ピアソン相関	0.608865565		
仮説平均との差異	0		
自由度	207		
t	0.45853279		
P(T<=t) 片側	0.323525378		
t 境界値 片側	1.652248086		
P(T<=t) 両側	0.647050756		
t 境界値 両側	1.971490344		

検定結果
 $P(T \leq t)$ 両側 $> 0.05 \Rightarrow$ よって、仮説は採択
 平均点の差は有意差は無い

■GRM

	前期	後期	平均点差
平均	65.811791045	74.28059701	8.5
分散	221.0116543	238.8970775	
観測数	335	335	
ピアソン相関	0.552234032		
仮説平均との差異	0		
自由度	334		
t	-10.78864236		
P(T<=t) 片側	8.79885E-24		
t 境界値 片側	1.649428568		
P(T<=t) 両側	1.75997E-23		
t 境界値 両側	1.967091894		

検定結果
 $P(T \leq t)$ 両側 $< 0.05 \Rightarrow$ よって、仮説は棄却
 平均点の差は有意差が有るといえる

■RDG

	前期	後期	平均点差
平均	63.53134328	61.60895522	-1.9
分散	169.3994638	159.4723747	
観測数	335	335	
ピアソン相関	0.505288505		
仮説平均との差異	0		
自由度	334		
t	2.757865477		
P(T<=t) 片側	0.003069084		
t 境界値 片側	1.649428568		
P(T<=t) 両側	0.006138169		
t 境界値 両側	1.967091894		

検定結果
 $P(T \leq t)$ 両側 $< 0.05 \Rightarrow$ よって、仮説は棄却
 平均点の差は有意差が有るといえる

■TTL

	前期	後期	平均点差
平均	151.3	163.8	12.4
分散	932.398	1425.841	
観測数	178	178	
ピアソン相関	0.749868001		
仮説平均との差異	0		
自由度	177		
t	-6.616629122		
P(T<=t) 片側	2.10656E-10		
t 境界値 片側	1.653508002		
P(T<=t) 両側	4.21313E-10		
t 境界値 両側	1.973457161		

検定結果
 $P(T \leq t)$ 両側 $< 0.05 \Rightarrow$ よって、仮説は棄却
 平均点の差は有意差が有るといえる

■LST

	前期	後期	平均点差
平均	41.88202247	46.04494382	4.2
分散	106.8278106	165.6250873	
観測数	178	178	
ピアソン相関	0.173290874		
仮説平均との差異	0		
自由度	177		
t	-3.691613235		
P(T<=t) 片側	0.000148278		
t 境界値 片側	1.653508002		
P(T<=t) 両側	0.000296555		
t 境界値 両側	1.973457161		

検定結果
 $P(T \leq t)$ 両側 $< 0.05 \Rightarrow$ よって、仮説は棄却
 平均点の差は有意差が有るといえる

■GRM

	前期	後期	平均点差
平均	54.70786517	65.07303371	10.4
分散	240.6260395	327.5709071	
観測数	178	178	
ピアソン相関	0.598850122		
仮説平均との差異	0		
自由度	177		
t	-9.080278235		
P(T<=t) 片側	1.05159E-16		
t 境界値 片側	1.653508002		
P(T<=t) 両側	2.10317E-16		
t 境界値 両側	1.973457161		

検定結果
 $P(T \leq t)$ 両側 $< 0.05 \Rightarrow$ よって、仮説は棄却
 平均点の差は有意差が有るといえる

■RDG

	前期	後期	平均点差
平均	54.75842697	52.66853933	-2.1
分散	238.376341	234.8330159	
観測数	178	178	
ピアソン相関	0.645633541		
仮説平均との差異	0		
自由度	177		
t	2.153123205		
P(T<=t) 片側	0.016331214		
t 境界値 片側	1.653508002		
P(T<=t) 両側	0.032662427		
t 境界値 両側	1.973457161		

検定結果
 $P(T \leq t)$ 両側 $< 0.05 \Rightarrow$ よって、仮説は棄却
 平均点の差は有意差が有るといえる

資料6の詳細データ

- 検定方法：t-検定（対の標本による平均の検定ツール）
- 実施テスト：G-TELP 前期6月実施（Form313） 後期12月実施（Form315）
- 対象者：22年度のG-TELPを前期（6月）、後期（8月）ともに受験した全受験生
- 帰無仮説：「前期試験の平均点と後期試験の平均点には有意差は無い」
- 判断基準 P(T<=t) 両側<有意水準（0.05） ⇒ 棄却 ⇒ 「有意差が無い」とはいえない ⇒ 有意差が有る
P(T<=t) 両側>有意水準（0.05） ⇒ 採択 ⇒ 有意差が無い ※両側検定にて判断

医学部（医学科）

■TTL

	前期	後期	平均点差
平均	210.5	221.6	11.1
分散	422.952	406.912	
観測数	64	64	
ピアソン相関	0.370617932		
仮説平均との差異	0		
自由度	63		
t	-3.877678133		
P(T<=t) 片側	0.00012717		
t 境界値 片側	1.669402222		
P(T<=t) 両側	0.00025434		
t 境界値 両側	1.998340522		

検定結果
P(T<=t)両側<0.05 ⇒ よって、仮説は棄却
平均点の差は有意差が有るといえる

■LST

	前期	後期	平均点差
平均	50.53125	59.09375	8.6
分散	108.1894841	131.0069444	
観測数	64	64	
ピアソン相関	0.128638048		
仮説平均との差異	0		
自由度	63		
t	-4.74315476		
P(T<=t) 片側	6.238E-06		
t 境界値 片側	1.669402222		
P(T<=t) 両側	1.2476E-05		
t 境界値 両側	1.998340522		

検定結果
P(T<=t)両側<0.05 ⇒ よって、仮説は棄却
平均点の差は有意差が有るといえる

医学部（保健学科）

■TTL

	前期	後期	平均点差
平均	162.7	176.8	14.1
分散	643.190	921.254	
観測数	103	103	
ピアソン相関	0.603403287		
仮説平均との差異	0		
自由度	102		
t	-5.687116176		
P(T<=t) 片側	6.19504E-08		
t 境界値 片側	1.659929976		
P(T<=t) 両側	1.23901E-07		
t 境界値 両側	1.983495205		

検定結果
P(T<=t)両側<0.05 ⇒ よって、仮説は棄却
平均点の差は有意差が有るといえる

■LST

	前期	後期	平均点差
平均	40.65048544	49.26213592	8.6
分散	104.2491909	131.7835523	
観測数	103	103	
ピアソン相関	0.120316085		
仮説平均との差異	0		
自由度	102		
t	-6.062515692		
P(T<=t) 片側	1.1407E-08		
t 境界値 片側	1.659929976		
P(T<=t) 両側	2.28141E-08		
t 境界値 両側	1.983495205		

検定結果
P(T<=t)両側<0.05 ⇒ よって、仮説は棄却
平均点の差は有意差が有るといえる

■GRM

	前期	後期	平均点差
平均	80.109375	85.5625	5.5
分散	155.6227679	72.72619048	
観測数	64	64	
ピアソン相関	0.394501973		
仮説平均との差異	0		
自由度	63		
t	-3.630246412		
P(T<=t) 片側	0.000284681		
t 境界値 片側	1.669402222		
P(T<=t) 両側	0.000569361		
t 境界値 両側	1.998340522		

検定結果
P(T<=t)両側<0.05 ⇒ よって、仮説は棄却
平均点の差は有意差が有るといえる

■RDG

	前期	後期	平均点差
平均	79.875	76.9375	-2.9
分散	119.031746	109.4563492	
観測数	64	64	
ピアソン相関	0.269432065		
仮説平均との差異	0		
自由度	63		
t	1.818592633		
P(T<=t) 片側	0.036863712		
t 境界値 片側	1.669402222		
P(T<=t) 両側	0.073727424		
t 境界値 両側	1.998340522		

検定結果
P(T<=t)両側>0.05 ⇒ よって、仮説は採択
平均点の差は有意差は無い

■GRM

	前期	後期	平均点差
平均	63.78640777	71.17475728	7.4
分散	207.1107938	270.6358271	
観測数	103	103	
ピアソン相関	0.462088382		
仮説平均との差異	0		
自由度	102		
t	-4.659739674		
P(T<=t) 片側	4.79707E-06		
t 境界値 片側	1.659929976		
P(T<=t) 両側	9.59414E-06		
t 境界値 両側	1.983495205		

検定結果
P(T<=t)両側<0.05 ⇒ よって、仮説は棄却
平均点の差は有意差が有るといえる

■RDG

	前期	後期	平均点差
平均	58.21359223	56.33980583	-1.9
分散	164.1500095	179.4030078	
観測数	103	103	
ピアソン相関	0.362177262		
仮説平均との差異	0		
自由度	102		
t	1.284311178		
P(T<=t) 片側	0.100971244		
t 境界値 片側	1.659929976		
P(T<=t) 両側	0.201942488		
t 境界値 両側	1.983495205		

検定結果
P(T<=t)両側>0.05 ⇒ よって、仮説は採択
平均点の差は有意差は無い

教育学部

■TTL

	前期	後期	平均点差
平均	150.0	165.0	15.1
分散	821.187	908.646	
観測数	262	262	
ピアソン相関	0.632838893		
仮説平均との差異	0		
自由度	261		
t	-9.670033415		
P(T<=t) 片側	2.09994E-19		
t 境界値 片側	1.650712727		
P(T<=t) 両側	4.19988E-19		
t 境界値 両側	1.969094666		

検定結果
P(T<=t)両側<0.05 ⇒ よって、仮説は棄却
平均点の差は有意差が有るといえる

■LST

	前期	後期	平均点差
平均	39.15648855	45.34351145	6.2
分散	103.6880612	117.7053026	
観測数	262	262	
ピアソン相関	0.21488328		
仮説平均との差異	0		
自由度	261		
t	-7.593880327		
P(T<=t) 片側	2.7688E-13		
t 境界値 片側	1.650712727		
P(T<=t) 両側	5.53761E-13		
t 境界値 両側	1.969094666		

検定結果
P(T<=t)両側<0.05 ⇒ よって、仮説は棄却
平均点の差は有意差が有るといえる

工学部

■TTL

	前期	後期	平均点差
平均	145.6	154.9	9.2
分散	809.191	919.111	
観測数	431	431	
ピアソン相関	0.591230913		
仮説平均との差異	0		
自由度	430		
t	-7.212982508		
P(T<=t) 片側	1.2438E-12		
t 境界値 片側	1.64840497		
P(T<=t) 両側	2.4876E-12		
t 境界値 両側	1.965496113		

検定結果
P(T<=t)両側<0.05 ⇒ よって、仮説は棄却
平均点の差は有意差が有るといえる

■LST

	前期	後期	平均点差
平均	39.91647332	43.10672854	3.2
分散	98.05347218	113.8676523	
観測数	431	431	
ピアソン相関	0.231332893		
仮説平均との差異	0		
自由度	430		
t	-5.187112359		
P(T<=t) 片側	1.64825E-07		
t 境界値 片側	1.64840497		
P(T<=t) 両側	3.2965E-07		
t 境界値 両側	1.965496113		

検定結果
P(T<=t)両側<0.05 ⇒ よって、仮説は棄却
平均点の差は有意差が有るといえる

■GRM

	前期	後期	平均点差
平均	57.34351145	66.00381679	8.7
分散	241.2378696	251.5593723	
観測数	262	262	
ピアソン相関	0.506138648		
仮説平均との差異	0		
自由度	261		
t	-8.984592463		
P(T<=t) 片側	2.67575E-17		
t 境界値 片側	1.650712727		
P(T<=t) 両側	5.35149E-17		
t 境界値 両側	1.969094666		

検定結果
P(T<=t)両側<0.05 ⇒ よって、仮説は棄却
平均点の差は有意差が有るといえる

■RDG

	前期	後期	平均点差
平均	53.46946565	53.69465649	0.2
分散	187.4914012	191.2933813	
観測数	262	262	
ピアソン相関	0.48871299		
仮説平均との差異	0		
自由度	261		
t	-0.261916145		
P(T<=t) 片側	0.396796339		
t 境界値 片側	1.650712727		
P(T<=t) 両側	0.793592678		
t 境界値 両側	1.969094666		

検定結果
P(T<=t)両側>0.05 ⇒ よって、仮説は採択
平均点の差は有意差は無い

■GRM

	前期	後期	平均点差
平均	54.45939675	61.42691415	7.0
分散	273.2768359	285.2591809	
観測数	431	431	
ピアソン相関	0.497406809		
仮説平均との差異	0		
自由度	430		
t	-8.632435678		
P(T<=t) 片側	5.89751E-17		
t 境界値 片側	1.64840497		
P(T<=t) 両側	1.1795E-16		
t 境界値 両側	1.965496113		

検定結果
P(T<=t)両側<0.05 ⇒ よって、仮説は棄却
平均点の差は有意差が有るといえる

■RDG

	前期	後期	平均点差
平均	51.23665893	50.32714617	-0.9
分散	170.5531646	192.2531916	
観測数	431	431	
ピアソン相関	0.433611865		
仮説平均との差異	0		
自由度	430		
t	1.316301853		
P(T<=t) 片側	0.094386979		
t 境界値 片側	1.64840497		
P(T<=t) 両側	0.188773959		
t 境界値 両側	1.965496113		

検定結果
P(T<=t)両側>0.05 ⇒ よって、仮説は採択
平均点の差は有意差は無い

歯学部

■TTL

	前期	後期	平均点差
平均	176.6	192.2	15.6
分散	371.908	560.618	
観測数	18	18	
ピアソン相関	0.322749191		
仮説平均との差異	0		
自由度	17		
t	-2.622613324		
P(T<=t) 片側	0.008912796		
t 境界値 片側	1.739606716		
P(T<=t) 両側	0.017825591		
t 境界値 両側	2.109815559		

検定結果
 $P(T \leq t)$ 両側 $< 0.05 \Rightarrow$ よって、仮説は棄却
 平均点の差は有意差が有るといえる

■LST

	前期	後期	平均点差
平均	48.66666667	48.38888889	-0.3
分散	47.05882353	101.8986928	
観測数	18	18	
ピアソン相関	-0.015856707		
仮説平均との差異	0		
自由度	17		
t	0.09585715		
P(T<=t) 片側	0.462377477		
t 境界値 片側	1.739606716		
P(T<=t) 両側	0.924754954		
t 境界値 両側	2.109815559		

検定結果
 $P(T \leq t)$ 両側 $< 0.05 \Rightarrow$ よって、仮説は棄却
 平均点の差は有意差が有るといえる

水産学部

■TTL

	前期	後期	平均点差
平均	144.7	163.0	18.2
分散	646.988	987.090	
観測数	134	134	
ピアソン相関	0.57939389		
仮説平均との差異	0		
自由度	133		
t	-7.937771592		
P(T<=t) 片側	3.78402E-13		
t 境界値 片側	1.656391245		
P(T<=t) 両側	7.56804E-13		
t 境界値 両側	1.977961236		

検定結果
 $P(T \leq t)$ 両側 $< 0.05 \Rightarrow$ よって、仮説は棄却
 平均点の差は有意差が有るといえる

■LST

	前期	後期	平均点差
平均	40.05970149	46.76865672	6.7
分散	113.0039277	142.9310403	
観測数	134	134	
ピアソン相関	0.292603367		
仮説平均との差異	0		
自由度	133		
t	-5.763624563		
P(T<=t) 片側	2.73254E-08		
t 境界値 片側	1.656391245		
P(T<=t) 両側	5.46507E-08		
t 境界値 両側	1.977961236		

検定結果
 $P(T \leq t)$ 両側 $< 0.05 \Rightarrow$ よって、仮説は棄却
 平均点の差は有意差が有るといえる

■GRM

	前期	後期	平均点差
平均	62.5	78.05555556	15.6
分散	187.6764706	180.1732026	
観測数	18	18	
ピアソン相関	0.035987658		
仮説平均との差異	0		
自由度	17		
t	-3.50464157		
P(T<=t) 片側	0.001358284		
t 境界値 片側	1.739606716		
P(T<=t) 両側	0.002716569		
t 境界値 両側	2.109815559		

検定結果
 $P(T \leq t)$ 両側 $< 0.05 \Rightarrow$ よって、仮説は棄却
 平均点の差は有意差が有るといえる

■RDG

	前期	後期	平均点差
平均	65.38888889	65.72222222	0.3
分散	180.0163399	150.8006536	
観測数	18	18	
ピアソン相関	0.558717697		
仮説平均との差異	0		
自由度	17		
t	-0.116759233		
P(T<=t) 片側	0.45420957		
t 境界値 片側	1.739606716		
P(T<=t) 両側	0.908419139		
t 境界値 両側	2.109815559		

検定結果
 $P(T \leq t)$ 両側 $> 0.05 \Rightarrow$ よって、仮説は採択
 平均点の差は有意差は無い

■GRM

	前期	後期	平均点差
平均	54.23880597	63.89552239	9.7
分散	190.4838963	303.9138144	
観測数	134	134	
ピアソン相関	0.529190897		
仮説平均との差異	0		
自由度	133		
t	-7.219485588		
P(T<=t) 片側	1.80246E-11		
t 境界値 片側	1.656391245		
P(T<=t) 両側	3.60493E-11		
t 境界値 両側	1.977961236		

検定結果
 $P(T \leq t)$ 両側 $< 0.05 \Rightarrow$ よって、仮説は棄却
 平均点の差は有意差が有るといえる

■RDG

	前期	後期	平均点差
平均	50.44776119	52.32835821	1.9
分散	171.5874762	155.5755807	
観測数	134	134	
ピアソン相関	0.374882503		
仮説平均との差異	0		
自由度	133		
t	-1.521700514		
P(T<=t) 片側	0.065229069		
t 境界値 片側	1.656391245		
P(T<=t) 両側	0.130458138		
t 境界値 両側	1.977961236		

検定結果
 $P(T \leq t)$ 両側 $> 0.05 \Rightarrow$ よって、仮説は採択
 平均点の差は有意差は無い

農学部

■TTL

	前期	後期	平均点差
平均	163.9	179.6	15.6
分散	1217.555	1374.924	
観測数	223	223	
ピアソン相関	0.697279538		
仮説平均との差異	0		
自由度	222		
t	-8.3057229		
P(T<=t) 片側	4.89E-15		
t 境界値 片側	1.651746359		
P(T<=t) 両側	9.78E-15		
t 境界値 両側	1.970707345		
検定結果	P(T<=t)両側<0.05 ⇒ よって、仮説は棄却 平均点の差は有意差が有るといえる		

■LST

	前期	後期	平均点差
平均	43.17040359	49.5426009	6.4
分散	132.5654264	169.0691229	
観測数	223	223	
ピアソン相関	0.363239173		
仮説平均との差異	0		
自由度	222		
t	-6.851795602		
P(T<=t) 片側	3.54567E-11		
t 境界値 片側	1.651746359		
P(T<=t) 両側	7.09135E-11		
t 境界値 両側	1.970707345		
検定結果	P(T<=t)両側<0.05 ⇒ よって、仮説は棄却 平均点の差は有意差が有るといえる		

法文学部

■TTL

	前期	後期	平均点差
平均	171.5	186.4	14.9
分散	723.312	711.975	
観測数	315	315	
ピアソン相関	0.607205687		
仮説平均との差異	0		
自由度	314		
t	-11.14083787		
P(T<=t) 片側	8.141E-25		
t 境界値 片側	1.649720831		
P(T<=t) 両側	1.6282E-24		
t 境界値 両側	1.967547632		
検定結果	P(T<=t)両側<0.05 ⇒ よって、仮説は棄却 平均点の差は有意差が有るといえる		

■LST

	前期	後期	平均点差
平均	42.84761905	50.8952381	8.0
分散	96.51173794	117.6291174	
観測数	315	315	
ピアソン相関	0.216640344		
仮説平均との差異	0		
自由度	314		
t	-11.02046204		
P(T<=t) 片側	2.14011E-24		
t 境界値 片側	1.649720831		
P(T<=t) 両側	4.28022E-24		
t 境界値 両側	1.967547632		
検定結果	P(T<=t)両側<0.05 ⇒ よって、仮説は棄却 平均点の差は有意差が有るといえる		

■GRM

	前期	後期	平均点差
平均	62.18834081	71.56950673	9.4
分散	265.03644	307.5705975	
観測数	223	223	
ピアソン相関	0.603325915		
仮説平均との差異	0		
自由度	222		
t	-9.275844583		
P(T<=t) 片側	8.10805E-18		
t 境界値 片側	1.651746359		
P(T<=t) 両側	1.62161E-17		
t 境界値 両側	1.970707345		
検定結果	P(T<=t)両側<0.05 ⇒ よって、仮説は棄却 平均点の差は有意差が有るといえる		

■RDG

	前期	後期	平均点差
平均	58.57847534	58.43946188	-0.1
分散	272.3080031	214.9591565	
観測数	223	223	
ピアソン相関	0.620012091		
仮説平均との差異	0		
自由度	222		
t	0.151702288		
P(T<=t) 片側	0.439779761		
t 境界値 片側	1.651746359		
P(T<=t) 両側	0.879559522		
t 境界値 両側	1.970707345		
検定結果	P(T<=t)両側>0.05 ⇒ よって、仮説は採択 平均点の差は有意差は無い		

■GRM

	前期	後期	平均点差
平均	65.16190476	73.55873016	8.4
分散	226.8494995	207.6549793	
観測数	315	315	
ピアソン相関	0.512269893		
仮説平均との差異	0		
自由度	314		
t	-10.23200993		
P(T<=t) 片側	1.0696E-21		
t 境界値 片側	1.649720831		
P(T<=t) 両側	2.13919E-21		
t 境界値 両側	1.967547632		
検定結果	P(T<=t)両側<0.05 ⇒ よって、仮説は棄却 平均点の差は有意差が有るといえる		

■RDG

	前期	後期	平均点差
平均	63.44126984	61.9015873	-1.5
分散	188.0498837	144.9297745	
観測数	315	315	
ピアソン相関	0.439018664		
仮説平均との差異	0		
自由度	314		
t	1.992861776		
P(T<=t) 片側	0.023570914		
t 境界値 片側	1.649720831		
P(T<=t) 両側	0.047141827		
t 境界値 両側	1.967547632		
検定結果	P(T<=t)両側<0.05 ⇒ よって、仮説は棄却 平均点の差は有意差が有るといえる		

■TTL

	前期	後期	平均点差
平均	149.7	162.4	12.7
分散	857.745	969.556	
観測数	173	173	
ピアソン相関	0.614586692		
仮説平均との差異	0		
自由度	172		
t	-6.30195202		
P(T<=t) 片側	1.19283E-09		
t 境界値 片側	1.65376095		
P(T<=t) 両側	2.38565E-09		
t 境界値 両側	1.97385213		

検定結果
 $P(T \leq t)$ 両側 $< 0.05 \Rightarrow$ よって、仮説は棄却
 平均点の差は有意差が有るといえる

■LST

	前期	後期	平均点差
平均	40.66473988	45.47398844	4.8
分散	124.9683425	108.4135637	
観測数	173	173	
ピアソン相関	0.289081361		
仮説平均との差異	0		
自由度	172		
t	-4.908337548		
P(T<=t) 片側	1.06036E-06		
t 境界値 片側	1.65376095		
P(T<=t) 両側	2.12071E-06		
t 境界値 両側	1.97385213		

検定結果
 $P(T \leq t)$ 両側 $< 0.05 \Rightarrow$ よって、仮説は棄却
 平均点の差は有意差が有るといえる

■GRM

	前期	後期	平均点差
平均	56.10982659	64.94797688	8.8
分散	214.5983331	257.6193709	
観測数	173	173	
ピアソン相関	0.394121275		
仮説平均との差異	0		
自由度	172		
t	-6.863313257		
P(T<=t) 片側	5.84738E-11		
t 境界値 片側	1.65376095		
P(T<=t) 両側	1.16948E-10		
t 境界値 両側	1.97385213		

検定結果
 $P(T \leq t)$ 両側 $< 0.05 \Rightarrow$ よって、仮説は棄却
 平均点の差は有意差が有るといえる

■RDG

	前期	後期	平均点差
平均	52.89595376	51.98265896	-0.9
分散	204.4774835	215.1101627	
観測数	173	173	
ピアソン相関	0.502500848		
仮説平均との差異	0		
自由度	172		
t	0.831296773		
P(T<=t) 片側	0.203479268		
t 境界値 片側	1.65376095		
P(T<=t) 両側	0.406958535		
t 境界値 両側	1.97385213		

検定結果
 $P(T \leq t)$ 両側 $> 0.05 \Rightarrow$ よって、仮説は採択
 平均点の差は有意差は無い

資料 7、8 の詳細データ

- t検定結果 帰無仮説：テスト間の平均点の差には有意差がない
- 帰無仮説を採択 \Rightarrow 有意差がない
- 帰無仮説を棄却 \Rightarrow 有意差がないとはいえない \Rightarrow 有意差がある
- t検定：一対の標本による平均の検定ツール

2009 年前期-2009 年後

	TTL(G+L+R)	TTL(G+L+R)
平均	152.3856549	164.8347193
分散	854.3120937	1022.302519
観測数	962	962
ピアソン相関	0.640732338	
仮説平均との差異	0	
自由度	961	
t	-14.81761755	
P(T<=t) 片側	3.40962E-45	
t 境界値 片側	1.646440774	
P(T<=t) 両側	6.81924E-45	
t 境界値 両側	1.962435544	

2009 年後期-2010 年前

	TTL(G+L+R)	TTL(G+L+R)
平均	164.8347193	166.7598753
分散	1022.302519	1413.552062
観測数	962	962
ピアソン相関	0.702324035	
仮説平均との差異	0	
自由度	961	
t	-2.184257042	
P(T<=t) 片側	0.01459222	
t 境界値 片側	1.646440774	
P(T<=t) 両側	0.029184441	
t 境界値 両側	1.962435544	

	GRM	GRM
平均	57.9989605	65.77650728
分散	249.6472414	276.6378242
観測数	962	962
ピアソン相関	0.495308512	
仮説平均との差異	0	
自由度	961	
t	-14.79198283	
P(T<=t) 片側	4.65075E-45	
t 境界値 片側	1.646440774	
P(T<=t) 両側	9.3015E-45	
t 境界値 両側	1.962435544	

	GRM	GRM
平均	65.77650728	62.8970894
分散	276.6378242	259.5076086
観測数	962	962
ピアソン相関	0.559396149	
仮説平均との差異	0	
自由度	961	
t	5.80879531	
P(T<=t) 片側	4.2745E-09	
t 境界値 片側	1.646440774	
P(T<=t) 両側	8.549E-09	
t 境界値 両側	1.962435544	

	LST	LST
平均	40.97505198	46.00727651
分散	102.2283051	126.5400094
観測数	962	962
ピアソン相関	0.187713132	
仮説平均との差異	0	
自由度	961	
t	-11.44223621	
P(T<=t) 片側	8.19895E-29	
t 境界値 片側	1.646440774	
P(T<=t) 両側	1.63979E-28	
t 境界値 両側	1.962435544	

	LST	LST
平均	46.00727651	49.8035343
分散	126.5400094	204.3619854
観測数	962	962
ピアソン相関	0.394744865	
仮説平均との差異	0	
自由度	961	
t	-8.244947536	
P(T<=t) 片側	2.69476E-16	
t 境界値 片側	1.646440774	
P(T<=t) 両側	5.38952E-16	
t 境界値 両側	1.962435544	

	RDG	RDG
平均	53.41164241	53.05093555
分散	203.5723097	195.3428763
観測数	962	962
ピアソン相関	0.55131474	
仮説平均との差異	0	
自由度	961	
t	0.836130332	
P(T<=t) 片側	0.201644717	
t 境界値 片側	1.646440774	
P(T<=t) 両側	0.403289433	
t 境界値 両側	1.962435544	

	RDG	RDG
平均	53.05093555	54.05925156
分散	195.3428763	270.2868082
観測数	962	962
ピアソン相関	0.53569936	
仮説平均との差異	0	
自由度	961	
t	-2.111164556	
P(T<=t) 片側	0.017507945	
t 境界値 片側	1.646440774	
P(T<=t) 両側	0.035015891	
t 境界値 両側	1.962435544	

1-4 各セクションの得点分布 詳細データ 1 (基礎統計)

基礎統計 (21 年前期)

Test Date : 2009/07

Test Location : 鹿児島大学 Ver313

Level : 3

Test Form : 313

Examinees : 2003

統計項目	GRM	LST	RDG	TTL (G+L+R)
標本数	2003	2003	2003	2003
平均	61.5	42.2	57.7	161.4
標準偏差 (n)	16.862	10.322	15.602	33.060
標準偏差 (n-1)	16.866	10.325	15.606	33.068
分散 (n)	284.314	106.550	243.432	1092.968
分散 (n-1)	284.456	106.603	243.553	1093.514
最小値	14	12	12	69
中央値	64	42	58	160
最大値	100	96	96	279
範囲	86	84	84	210
第 1 四分位数	50	33	46	138
第 3 四分位数	73	50	67	184
歪度	-0.090	0.111	0.019	0.110
尖度	-0.578	0.338	-0.317	-0.156
変動係数	0.274	0.245	0.270	0.205

基礎統計 (21 年後期)

Test Date : 2009/12/14

Test Location : 鹿児島大学

Level : 3

Test Form : 315

Examinees : 1759

統計項目	GRM	LST	RDG	TTL (G+L+R)
標本数	1759	1759	1759	1759
平均	68.5	47.4	55.7	171.6
標準偏差 (n)	16.882	11.646	14.695	34.191
標準偏差 (n-1)	16.887	11.649	14.699	34.200
分散 (n)	285.013	135.620	215.944	1169.000
分散 (n-1)	285.175	135.697	216.067	1169.665
最小値	18	12	4	52
中央値	68	46	54	172
最大値	100	96	100	279
範囲	82	84	96	227
第 1 四分位数	59	42	46	148
第 3 四分位数	82	54	67	194
歪度	-0.338	0.170	-0.100	-0.039
尖度	-0.426	0.349	0.077	-0.025
変動係数	0.247	0.246	0.264	0.199

基礎統計 (22 年前期 1 年生)

Test Date : 2010/06/22

Level : 3

Examinees : 1980

Test Location : 鹿児島大学 1 年生

Test Form : 313

統計項目	GRM	LST	RDG	TTL (G+L+R)
標本数	1980	1980	1980	1980
平均	60.6	42.0	57.7	160.2
標準偏差 (n)	16.678	10.845	15.803	33.322
標準偏差 (n-1)	16.682	10.847	15.807	33.331
分散 (n)	278.160	117.606	249.734	1110.385
分散 (n-1)	278.300	117.665	249.861	1110.946
最小値	14	12	8	56
中央値	59	42	58	159
最大値	100	92	100	287
範囲	86	80	92	231
第 1 四分位数	50	33	46	138
第 3 四分位数	73	50	67	182
歪度	-0.089	0.212	-0.035	0.097
尖度	-0.552	0.371	-0.359	-0.043
変動係数	0.275	0.258	0.274	0.208

基礎統計 (22 年前期 2 年生)

Test Date : 2010/06/22

Level : 3

Examinees : 1070

Test Location : 鹿児島大学 2 年生

Test Form : 319

1. 基礎統計

統計項目	GRM	LST	RDG	TTL (G+L+R)
標本数	1070	1070	1070	1070
平均	63.2	49.9	54.7	167.7
標準偏差 (n)	16.242	14.327	16.748	38.364
標準偏差 (n-1)	16.249	14.334	16.756	38.382
分散 (n)	263.790	205.275	280.485	1471.778
分散 (n-1)	264.037	205.467	280.747	1473.155
最小値	14	8	12	56
中央値	64	50	54	168
最大値	100	96	96	287
範囲	86	88	84	231
第 1 四分位数	50	42	42	142
第 3 四分位数	77	58	67	193
歪度	-0.265	0.153	-0.090	0.030
尖度	-0.411	0.034	-0.349	-0.127
変動係数	0.257	0.287	0.306	0.229

基礎統計 (22 年後期)

Test Date : 2010/12/12

Level : 3

Examinees : 1766

Test Location : 鹿児島大学(101212)全体

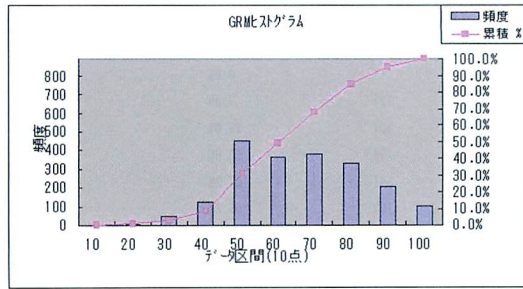
Test Form : 315

統計項目	GRM	LST	RDG	TTL (G+L+R)
標本数	1766	1766	1766	1766
平均	67.9	47.3	56.0	171.2
標準偏差 (n)	17.051	11.835	14.739	34.165
標準偏差 (n-1)	17.056	11.838	14.743	34.174
分散 (n)	290.737	140.057	217.237	1167.220
分散 (n-1)	290.902	140.137	217.360	1167.882
最小値	9	4	4	51
中央値	68	46	58	172
最大値	100	92	96	279
範囲	91	88	92	228
第 1 四分位数	55	38	46	149
第 3 四分位数	82	54	67	194
歪度	-0.348	0.098	-0.179	-0.132
尖度	-0.347	0.355	-0.092	0.107
変動係数	0.251	0.250	0.263	0.200

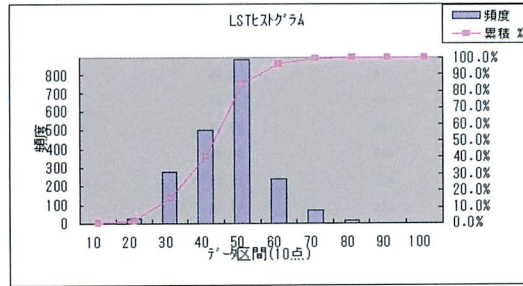
1-4 各セクションの得点分布 詳細データ2 (ヒストグラム)

各セクションの得点分布 (21 年前期)

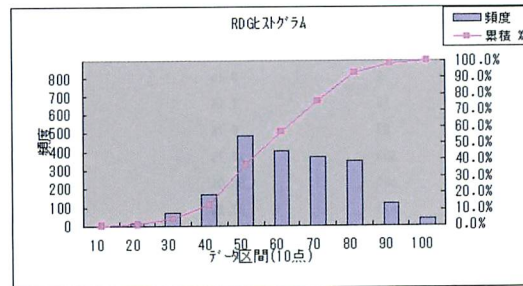
GRM			
データ区間 (10 点)	頻度	累積 %	
10	0	0.0%	
20	8	0.4%	
30	46	2.7%	
40	120	8.7%	
50	447	31.0%	
60	362	49.1%	
70	379	68.0%	
80	330	84.5%	
90	209	94.9%	
100	102	100.0%	



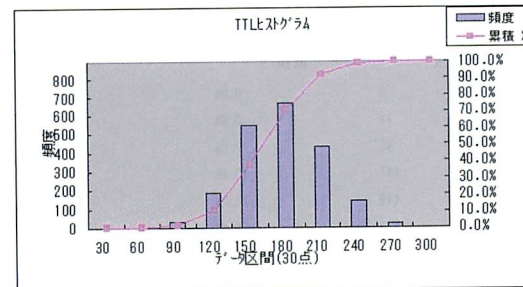
LST			
データ区間 (10 点)	頻度	累積 %	
10	0	0.0%	
20	22	1.1%	
30	277	14.9%	
40	501	39.9%	
50	880	83.9%	
60	239	95.8%	
70	70	99.3%	
80	13	100.0%	
90	0	100.0%	
100	1	100.0%	



RDG			
データ区間 (10 点)	頻度	累積 %	
10	0	0.0%	
20	11	0.5%	
30	71	4.1%	
40	169	12.5%	
50	485	36.7%	
60	405	57.0%	
70	368	75.3%	
80	345	92.6%	
90	115	98.3%	
100	34	100.0%	

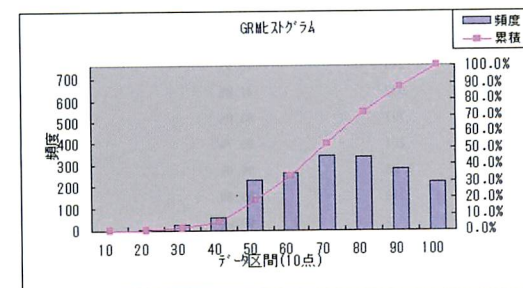


TTL (G+L+R)			
データ区間 (30 点)	頻度	累積 %	
30	0	0.0%	
60	0	0.0%	
90	30	1.5%	
120	183	10.6%	
150	543	37.7%	
180	664	70.9%	
210	425	92.1%	
240	138	99.0%	
270	19	100.0%	
300	1	100.0%	



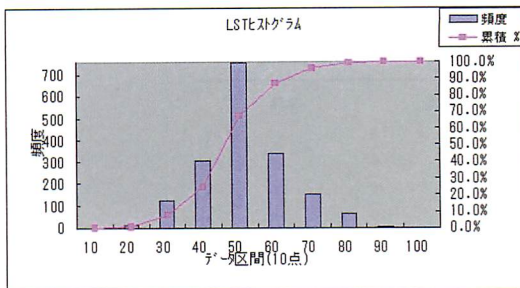
各セクションの得点分布 (21 年後期)

GRM			
データ区間 (10 点)	頻度	累積 %	
10	0	0.0%	
20	3	0.2%	
30	24	1.5%	
40	58	4.8%	
50	229	17.9%	
60	263	32.8%	
70	341	52.2%	
80	337	71.3%	
90	281	87.3%	
100	223	100.0%	



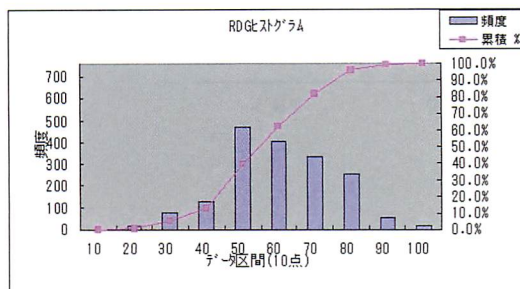
LST

データ区間(10点)	頻度	累積 %
10	0	0.0%
20	11	0.6%
30	121	7.5%
40	307	25.0%
50	754	67.8%
60	341	87.2%
70	153	95.9%
80	66	99.7%
90	5	99.9%
100	1	100.0%



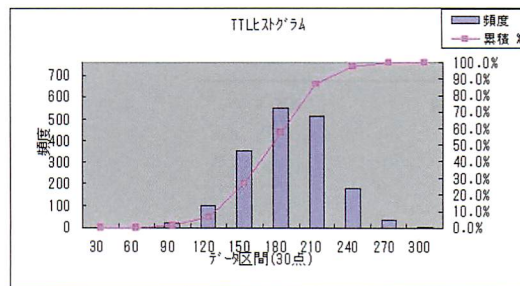
RDG

データ区間(10点)	頻度	累積 %
10	2	0.1%
20	14	0.9%
30	80	5.5%
40	128	12.7%
50	469	39.4%
60	405	62.4%
70	336	81.5%
80	257	96.1%
90	55	99.3%
100	13	100.0%



TTL (G+L+R)

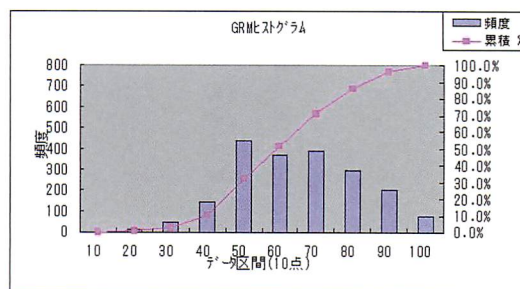
データ区間(30点)	頻度	累積 %
30	0	0.0%
60	2	0.1%
90	18	1.1%
120	97	6.7%
150	353	26.7%
180	550	58.0%
210	513	87.2%
240	185	97.7%
270	37	99.8%
300	4	100.0%



各セクションの得点分布 (22年前期 1年生)

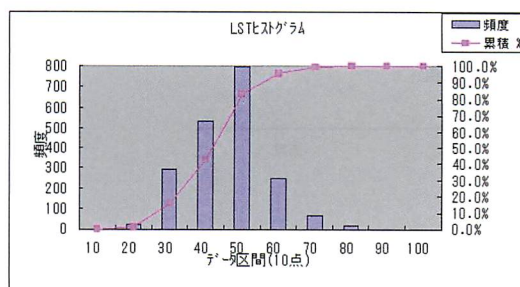
GRM

データ区間(10点)	頻度	累積 %
10	0	0.0%
20	11	0.6%
30	45	2.8%
40	147	10.3%
50	440	32.5%
60	374	51.4%
70	385	70.8%
80	296	85.8%
90	203	96.0%
100	79	100.0%



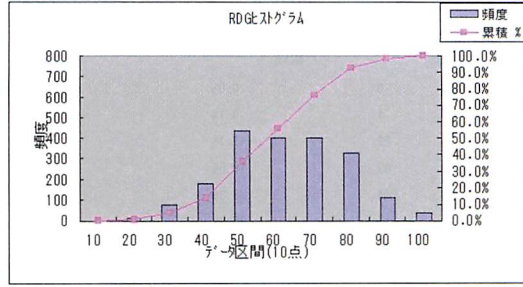
LST

データ区間(10点)	頻度	累積 %
10	0	0.0%
20	21	1.1%
30	293	15.9%
40	533	42.8%
50	797	83.0%
60	251	95.7%
70	66	99.0%
80	16	99.8%
90	2	99.9%
100	1	100.0%



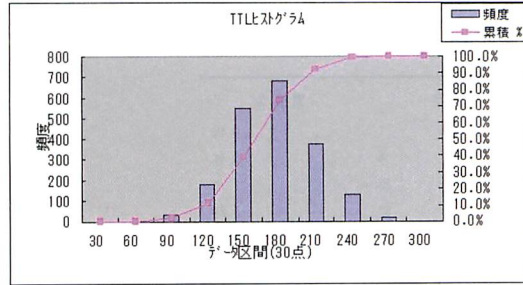
RDG

得点区間(10点)	頻度	累積%
10	1	0.1%
20	10	0.6%
30	79	4.5%
40	181	13.7%
50	436	35.7%
60	400	55.9%
70	401	76.2%
80	328	92.7%
90	109	98.2%
100	35	100.0%



TTL (G+L+R)

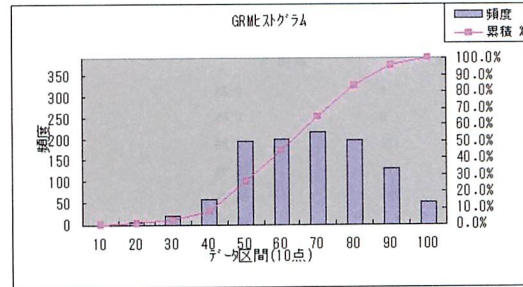
得点区間(30点)	頻度	累積%
30	0	0.0%
60	1	0.1%
90	32	1.7%
120	184	11.0%
150	553	38.9%
180	682	73.3%
210	378	92.4%
240	131	99.0%
270	18	99.9%
300	1	100.0%



各セッションの得点分布 (22年前期 2年生)

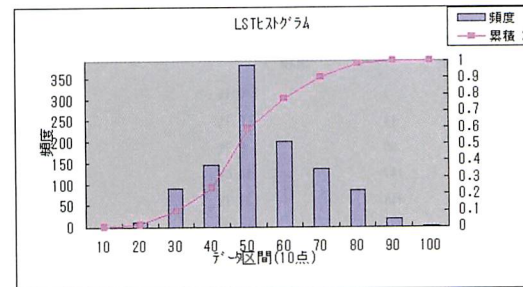
GRM

得点区間(10点)	頻度	累積%
10	0	0.0%
20	5	0.5%
30	20	2.3%
40	58	7.8%
50	193	25.8%
60	200	44.5%
70	216	64.7%
80	196	83.0%
90	132	95.3%
100	50	100.0%



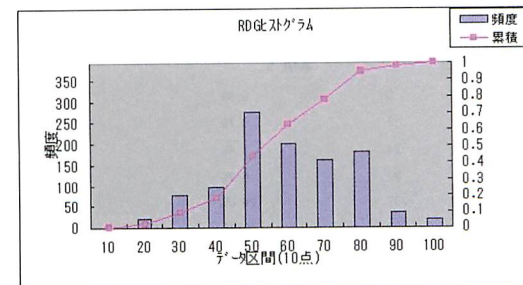
LST

得点区間(10点)	頻度	累積%
10	1	0.1%
20	11	1.1%
30	92	9.7%
40	145	23.3%
50	380	58.8%
60	200	77.5%
70	136	90.2%
80	85	98.1%
90	18	99.8%
100	2	100.0%



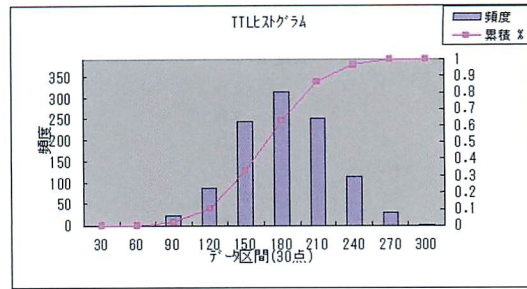
RDG

得点区間(10点)	頻度	累積%
10	0	0.0%
20	21	2.0%
30	79	9.3%
40	96	18.3%
50	275	44.0%
60	201	62.8%
70	161	77.9%
80	183	95.0%
90	36	98.3%
100	18	100.0%



TTL (G+L+R)

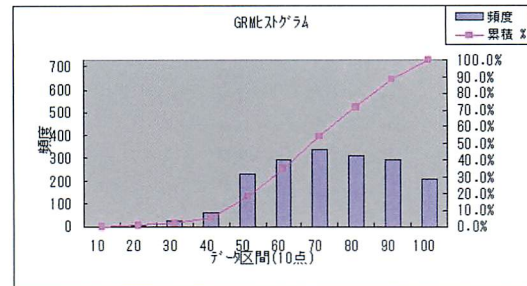
データ区間 (30点)	頻度	累積 %
30	0	0.0%
60	1	0.1%
90	22	2.1%
120	89	10.5%
150	244	33.3%
180	315	62.7%
210	250	86.1%
240	115	96.8%
270	31	99.7%
300	3	100.0%



各セクションの得点分布 (22年後期)

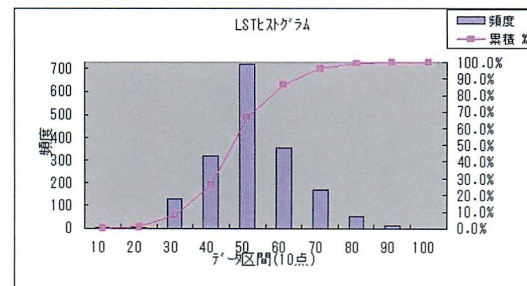
GRM

データ区間 (10点)	頻度	累積 %
10	1	0.1%
20	6	0.4%
30	23	1.7%
40	62	5.2%
50	229	18.2%
60	293	34.8%
70	339	54.0%
80	313	71.7%
90	293	88.3%
100	207	100.0%



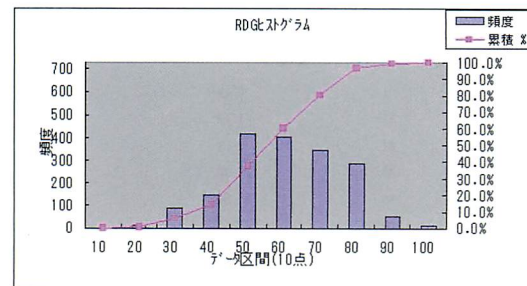
LST

データ区間 (10点)	頻度	累積 %
10	4	0.2%
20	6	0.6%
30	128	7.8%
40	319	25.9%
50	721	66.7%
60	351	86.6%
70	172	96.3%
80	54	99.4%
90	10	99.9%
100	1	100.0%



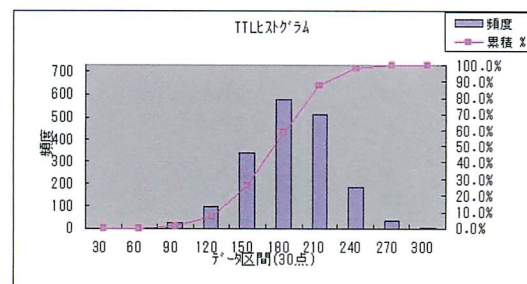
RDG

データ区間 (10点)	頻度	累積 %
10	1	0.1%
20	11	0.7%
30	89	5.7%
40	147	14.0%
50	418	37.7%
60	404	60.6%
70	347	80.2%
80	286	96.4%
90	53	99.4%
100	10	100.0%



TTL (G+L+R)

データ区間 (30点)	頻度	累積 %
30	0	0.0%
60	1	0.1%
90	24	1.4%
120	97	6.9%
150	337	26.0%
180	580	58.8%
210	511	87.8%
240	178	97.8%
270	35	99.8%
300	3	100.0%



鹿児島大学 英語教育改革報告書 II
平成 23 (2011) 年 3 月 31 日発行

編集・発行：鹿児島大学教育センター外国語教育推進部
富岡龍明*、高橋玄一郎*、金岡正夫、村山陽平*、
John Tremarco、Anne Brasier (*は編集者)

〒890-0065 鹿児島県鹿児島市郡元 1-21-30
TEL/FAX: 099-285-7111(代表)

印刷：渕上印刷株式会社
〒891-0122 鹿児島県鹿児島市南栄 3-1-6
TEL: 099-268-1002
